

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

第54号

2024年8月9日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1
TEL (0980) 87-6257

目 次

『竹富町史だより』〈第 54 号〉発刊にあたって	(石垣久雄) 1
西表小中学校の稲作体験学習 ―稲刈り―	(米盛恭子) 2
ヤマネコ騒動記 ―石垣金星氏遺稿―	(石垣金星) 4
石垣金星氏著作目録	14
琉球大学名誉教授 西里喜行氏を悼む	(石垣久雄) 19
追悼 西里喜行先生	(狩俣恵一) 21
西里喜行氏著作目録	23
諸見里秀思を訪ねて	(石原絹子) 31
鳩間公民館の起案資料 (一部)	(大城 肇) 37
「白浜歴史年表」の作成について	(大城一文) 45
〈資料紹介〉大原公民館会務綴 一九五六年度	55
姉妹町交流 50 年のあゆみ展 ―斜里町・竹富町姉妹町盟約 50 周年記念事業―	56
竹富町史所蔵写真のデジタル化事業について	(米盛恭子) 69
編集後記	71

● 〈表紙〉はじめての稲作体験学習 ●

表紙の写真は、2012 年（平成 24）6 月 24 日に行われた西表小中学校の稲作学習で足踏み脱穀機を使って脱穀をしている様子です。初めての稲刈り、初めての足踏み脱穀機に興味津々の 1 年生。後方では、慣れた手つきで稲を束ねる中学生。暑い日差しに負けず、全員で作業します。

『竹富町史だより』〈第 54 号〉 発刊にあたって

竹富町史編集委員会

委員長 石 垣 久 雄

今、島々村々には、わたしたちの竹富町の町鳥であるアカショウビン（竹富島では「ホッカルー」）が、朝夕元気な鳴き声で私たち町民を励ましております。このような時節に『竹富町史だより』〈第 54 号〉が発刊され、町民のお手元にお届けすることができたことを編集スタッフ一同喜んでおります。

〈第 54 号〉の主な内容は、①近年、近日ご逝去された故石垣金星氏、故西里喜行氏お二方の追悼をはじめその他の追悼関係、②は新たな公民館資料の件、③は姉妹町である北海道斜里町との交流写真展の報告などです。

①の故石垣金星氏をご存知のとおり西表島出身で竹富町史編集委員として 1999 年から 2003 年の 4 年間で 2005 年から 2022 年の 17 年間、合わせて 21 年間、町史編集に携わり竹富町の文化発展に多大な功績を残し、2022 年 6 月 30 日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます。

故西里喜行氏は竹富島出身で 1991 年、竹富町史編集委員会発足当時から編集副委員長として、2024 年 2 月 2 日にお亡くなりになるまで 33 年間、町史編集に携わって竹富町の文化発展に貴重な提案をなし、町史編集作業に大きな示唆を与えてくれました。ご冥福をお祈り申し上げます。

②の公民館資料等の保存・保管、活用は、その地域の住民の生活文化活動の原動力であり大事な仕事です。『竹富町史だより』の標榜は「町民参加の町史づくり」です。それは町民ひとりびとりが主人公となり、自分たちの住む地域をより豊かに、より楽しく、より住みよい場に創造して行くことです。

町史編集委員会もそのことを最重要視して各公民館の資料等の保存・保管、活用に積極的に係わっていかねばならないと考えております。資料、史料は活用されてはじめて歴史創造の原動力となるからです。ひとりびとりの意見が多数の意見となり、ひとりびとりの行動が多数の行動となって行った時、歴史はつくられるといわれています。すなわち町民の声、町民の行動が歴史ともいえます。そのとき資料は地域づくりに「資」する大切な宝となりえます。

③につきましては、姉妹町である斜里町と竹富町との姉妹町盟約は 1973 年に結ばれ、昨年 2023 年で 50 年になりました。約 3,000km という遠隔の地、斜里町と 50 年の親善交流史は私たちに、住む場所、気候、風土、文化は異なっている、親善交流を通して相互の理解が深まることを教えてくれました。姉妹町との交流については『竹富町史だより』〈第 52 号〉に特集されていますので、今一度読んでいただければ幸甚に存じます。交流史百年に向け、さらにきずなを強く、太く発展させていきましょう。

竹富町史島々編シリーズ、「西表島編」、「黒島編」の発行に、只今鋭意努力中でございます。みなさんのご協力をお願い致しまして発刊に寄せるあいさつといたします。

西表小中学校の稲作体験学習 ―稲刈り―

米 盛 恭 子

6月になると西表島のあちらこちらの田んぼでは稲刈りが始まります。

黄金色の稲穂や、刈り取った後の藁の香り、この時期にのみ謡うことが許される《仲良田節》の旋律を聴きながら、豊作に感謝します。

『西表小学校百年誌 西の子』（西表小学校、1991年）によると、西表小中学校で勤労生産学習の一環として稲作学習が始まったのは、1980年（昭和55）からとのこと（*1）。実に44年前に遡ります。さらに、稲作学習のねらいとして「単に技術を子どもたちに傳承することではない。（中略）五百年以上も前から稲作が行われてきたという地域の特色を生かして、勤労生産学習に稲作学習を取り入れている」と述べています。稲作が身近な地域にあっても、実際に稲作に関わる体験をすることは、このような学校の働きかけによるところが大きいのではないのでしょうか。

さらに、「稲作学習の流れ」では、田おこし、塩水選、浸種、催芽、稲代づくり、播種、田植え、畦払い、田草取り、追肥、水抜き、田の溝堀り、稲刈り、もちつき大会までの一連の流れは、この頃に整えられ、工夫改善されながら、現在に続いていることがわかります。どの行程も、PTA役員や地域の協力で成り立っており、西表小中学校に限らず、島の学校行事や活動は、学校、保護者、地域が一体となって継続されていることを実感します。

表紙の写真が撮られた12年前は、与那田橋付近の水田を借地していましたので、それ以前に2度場所を移動したことがわかります。その後何度か場所を移動しながら、現在まで稲作学

習が継続されています。ちなみに、今年度（2024年）は、6月21日に稲刈りを行い、後日「新米おにぎり作り」が予定されている（*2）とのこと。「足踏み脱穀機」は今でも使われていますが、1991年当時に使われていた「千歯こき」や「トウミ」は、2012年にはすでに使用しておらず、今年度も使われていないようです。

西表島で稲作ができるのは、豊かな水が確保できることが挙げられます。水が豊富な西表島のなかでも、特に西部の仲良川流域に広がる田んぼは大変美しく、古くから「仲良田」と呼ばれ、その情景は八重山を代表する民謡の一つ《仲良田節》にも謡われています。《仲良田節》は初穂を神前に奉納する「シコマ」と呼ばれる儀式の日から、豊年祭までの期間にのみ謡うことが許される神聖な歌でもあります。もちろん西表小中学校の稲刈り後にも収穫を喜び《仲良田節》が謡われています。

地域には、種子取、田植え、世願い、初穂刈、豊年祭など稲作と結びついた多くの祭祀儀礼が継承されていますが、2024年（令和6）現在、西部地区で稲作をしている人は、約10軒ほどだといいます。生業以外で米作りをしている人も多くいて、その主な理由としては、自分たち（各家庭）で食べるため、御嶽に奉納するため、豊年祭の綱引き用の藁を確保するためなどが挙げられます。地元で生まれ育った人のほか、他の地域から移り住んできた人たちが、休耕田を開き稲作をしていることも、今なお農耕と祭祀儀礼が結び付きながら生活が営まれている大きな理由だと考えられます。

さて、学校の稲作学習の風景は今も変わらず、

受け継がれているかに見えますが、一方で、現代農業の機械化は必至のこと。特に学校の学習の一環ともなれば、手植えも、手刈りも時間内で済ませなければならず、自ずと残りは機械植えに機械刈り、脱穀から乾燥まで、一部を除いて機械を使うことも理解できます。

1991年、中学1年生だった星英崇さんは、「僕らが中学生のころ（30年くらい前）までは、それぞれが自分の鎌を持っていて、稲刈りの前にはきちんと鎌を研いで、準備していた。足踏み脱穀機どころか、千歯こきを使ったり、二本の竹で稲穂をしごいて、粃を取ったりしていた。」と振り返ります。

「切れない鎌を使うとケガをする。」「作業の前には、鎌を研ぎ、道具の手入れをする。」「稲刈りの時、稲をつかむ手は親指を上にしてこう

握る。」「一束ずつ、くるっとう巻いて、刈った茎の上に置く。」地域のオジーが指導してくれた言葉は、ずっと覚えているものです。

とは言うものの、「草刈りにはビーバー（自動刈り払機）！」が当たり前となった便利な世の中では、草刈りの前には鎌を研いだことも遠い昔の話のよう。

そんなことを考えながら今年も新米の香りに包まれるのです。

い〜かざ〜す〜（良い匂いがする）（*3）。

*1 廣瀬要平「稲作学習について」（『西表小学校百年誌西の子』西表小学校、1991年）556～559頁参照。

*2 「児童生徒ら汗だく稲刈り―西表小中で伝統の体験学習」『八重山毎日新聞』2024年（令和6）7月8日参照。

*3 前大用安『西表方言集』（2002年）82頁参照。



ヤマネコ騒動記 ―石垣金星氏遺稿―

石 垣 金 星

ヤママヤーは山の神さま

西表島では昔から「ヤママヤー」と呼び「山の神さま」としてとりわけ猪猟をする人々にとっては特別な存在でもある。「ヤマ」とは「山」のこと、「マヤー」とは「猫」のこと、つまり山にいる猫であることから「山猫・ヤマネコ」と一般的に呼ばれるようになったものである。西表島で500年以上に及んで田んぼをつくり人々は暮らし豊かな稲作文化を継承している。東部地域の古見村そして西部地域の祖納村では「ヤママヤー」と呼んでいる。祖納においてはたくさんの稲作儀礼・祈願のアヨー&ジラーがある。種子取祝(タナドゥリヨイ)で謡い飾られる《稲が種子アヨー》の句に「インヌキニ マサラシマヤヌキニ マサラシ」というムニ飾りが出てくる。「苗代にまいた稲の種子が犬の毛よりも、山猫の毛よりも密集して生えますように」という祈願をする。このように500年以上に及び私どもは先祖代々「ヤママヤーは山の神さまとして畏れ」敬意を持ち、島と共に島があるまで、すべての生き物も人間も共に繁盛しますようにという最大限の願いが込められている。そして田んぼを耕すということは我ら島人がヤママヤーを養ってきたということでもある。

どういうことかといえば、耕した田んぼにはミミズはじめアンピタ(タニシ)、アブター(カエル)その他様々な生き物が繁殖する。それを食べるにオイザー(ネズミ)や野鳥がやってくる。それを食べるにパブ(ハブ)がやってくる。このようにご馳走がいっぱい溢れる田んぼにヤママヤーがやってくるというわけで田んぼこそヤママヤーの最高の餌場となる、という意味合いか

らいわれている。化学肥料もない農薬もない時代の稲作の伝統とは西表島の奥深い山々から流れ出す自然界のブク(有機物)をうまく取り入れることにより毎年豊かな実りをいただくことができたのである。近代農業は機械化農業へととなり耕作面積の拡大により収穫も飛躍的に増産し農家にとってはこの上ない喜びをもたらした。

しかし近代化農業へととなりヤママヤーにとって一番の脅威は大量の除草剤の使用にある。やがて世界自然遺産登録される見通しであるが、ヤママヤーと人間が共存していくためにも稲作栽培において除草剤などの農薬は使わず無農薬農業&有機農業を積極的に推進し、ヤママヤーの餌場を安全安心なものにしていくことが今後の大きな課題とされる。

イリオモテヤマネコの発見?

このように500年に及び山の神さまとして我らの暮らしの中で大切にされてきたヤママヤーであるが、学問の世界において学者研究者の目にとまり調査研究の結果、世界的に見ても極めて貴重であり、新種のヤマネコということが証明されたことから、これまでは西表島だけの宝物であったのが一躍有名になり世界の宝物になった。

「西表島に未知のヤマネコ」というニュースをテレビで見たのが1965年、私が大学2年次でパスポートを手に日本の大学へ留学中のことだった。1964年日本で初めて開催された東京オリンピックの翌年のことであった。西表島祖納集落で生まれ育った私にとってはヤママヤーの存在は当たり前前に知っていたことから特別驚きもし

なかったが、学者の研究により「イリオモテヤマネコ」として命名され更に新種であると認定され一躍「原始の島・西表島」などとメディアに取り上げられ有名になった。認定に至る研究経過については坂口法明氏が別項に書いているので参考していただきたい。ヤマネコ研究を進める上で様々な情報、個体の提供など島の人々は純粋な思いから協力を惜しまなかったことがあればこそであった。西表干立出身の黒島寛松氏は当時沖縄営林署勤務で、西表島にも長いこと勤務していたことから、西表島の山々をくまなく歩き、西表島の自然について誰よりも良く知る方だったので、島の人々から多くの情報提供を受け戸川幸夫氏に積極的に協力してヤマネコ研究に大いに貢献した一人である。そしてイリオモテヤマネコの存在により西表島の豊かな大自然に光が当たるであろうと大いに期待もされた。

ところがすでに、1955年～2005年までの50年間に及び、西表島の原生林伐採契約が時の琉球政府と十条製紙との間で結ばれ、西表島の西部地域仲良川流域を中心にパルプ材として次々と山々の木々が切られ大きなバージ（荷船）に満載して運搬されていくのを、まだ小学生だった私は見ていた。

さらに1960年には日本政府、スタンフォード大学による西表開発調査団が来島し、「西表開発構想」なるものが大々的に打ち上げられた。しかしこの大掛かりな西表島開発構想は実現することなくたち消えとなった。

また300年以上に及び西表島はマラリアの巣窟として我ら島の人々は苦しめられてきた。公務員は西表島へ赴任するときは家族と別れの盃を交わし赴任したという。西表島へ行くとマラリアにかかりおそらく生きては帰れないであろう、ということからであったという。そのマラリアは戦後アメリカ民政府により1961年撲滅された。私が中学2年生のときであった。今で

こそ豊かな大自然などと美しい言葉で表現されているが、先祖代々数百年に及んだ最大の難敵マラリアとの闘いの歴史は決して忘れることなく、記憶を記録に残し次の世代へ引き継ぐことが大切であろう。

イリオモテヤマネコ研究と保護

1965年3月西表島で「未知のヤマネコ発見」というテレビニュースを見て、パスポートを手に西表島を訪れた若者がいた。それから西表島の不思議な魅力にどっぷりとりつかれていくこととなる。イリオモテヤマネコ研究のために若い情熱を注いだ生態学者安間茂樹氏である。イリオモテヤマネコの生態&行動に関する貴重な研究報告が出版されている。イリオモテヤマネコ研究について彼の名前は後世に伝えていきたいと思う。西表島に関して多数本も書いているので、詳しくはそれらを参考にさせていただきたい。

1960年代は西表島の東と西を結ぶ道はなく、歩いて山越えするか、あるいは海岸線浜ぞいを歩いていくか、または石垣島へ出て船で西表島へ渡る、という方法しかなかった。その後安間茂樹氏は西表島東部地区に住み研究活動をしていたことからなかなかお会いすることは困難で2、3度しかお会いし話すことができなかったが、ともかく熱血漢の人柄であった。

一方では今泉吉典先生関係の研究者もヤマネコ研究のために西表島東部地区を拠点にして取り組んでいた頃である。当時はヤマネコについてほとんど何もわかっていないことから、多くの研究者&写真家たちが西表島へやってきた。そして地元新聞ではヤマネコ研究についての記事がよく紹介されていたが、ときには研究者同士のトラブルなども紙面を賑わしていた。

白浜 — 大富縦断道路

沖縄の日本への復帰がほぼ決まりかけていた1970頃、復帰記念事業の前倒しのように西表島の東西を結ぶ北岸道路工事が着工され、さらに西表島の山々のど真ん中・白浜—大富を結ぶ縦断道路工事も着工していた。こうして西表島開発の美名のもと、ブルドーザーの音と共に山々を切り崩し突き進んで行った。夏休み島に帰省していたときでもありその白浜側からの縦断道路工事現場を見にいったとき、機械のその威力の物凄さに驚いた。これまで「大自然の宝庫」「西表島の開発」という言葉は、西表島の未来を発展させる切り札のように言われてきたのであるが、その「開発現場の姿」をこの目で見たとき唖然とし言葉を失った。山を切り崩した赤土は、谷へ落とされ川を流れて赤崎川を通り、外離島&内離島の青い海は真っ赤な海へと染まっていた。こんなにも真っ赤に染まった海を見たのは初めてであった。その赤土によりリーフのサンゴが埋め尽くされ赤崎、外離島、内離島島にタコが上がりなくなり、タコが取れなくなった。

そして1971年3月祖納では田植えも無事済ませ腰ゆくい（腰休め）していたころ、降った雨により縦断道路工事で谷に落とされた赤土が一気に流れ出し、一夜にして美田良地区の植えたばかりの田んぼはほとんど埋め尽くされてしまったのだ。まさかこういうことになるとは誰も予想だにできなかったという。

西表島の開発により島は発展するであろうと誰もが期待してきたが、植えたばかりの田んぼが埋め尽くされるというのが開発の現実の姿であった。

住民にとっては生活の基盤が根こそぎ埋め尽くされるという深刻な死活問題であることからすぐさま行動を起こした。祖納住民代表と共に瀬戸弘竹富町長も同行し沖縄県庁へ直訴した。

このニュースを新聞で知り、当時那覇にいた私は住民の皆さんと同行し県庁へ行った。前年帰省したときに撮影した工事現場の写真を関係部局へ見せ現実の姿を知らせることにした。このような住民の直訴により白浜—大富間の縦断道路工事はストップされた。そして生活の保証はもとより、その後は埋め尽くされた水田地域全体の基盤整備事業が緊急に着手され、現在のように整備されるに至った。そして縦断道路工事は再開することはなく現在のような元のジャングルへと回復している。この白浜—大富間縦断道路工事が止まった要因として「イリオモテヤマネコ保護」があった、ということが建前とされているが、それは正しい選択であった。当初この縦断道路計画は北岸道路と並んで住民の生活道路として整備する、という触れ込みであったが、後々分かったことであるが実は十条製紙のための伐採道路として計画であったという。

ライハウゼン博士のイリオモテヤマネコ保護について提言

1973年、祖納に西表西部診療所医師として京都から下田正夫医師が赴任してきた。診療所の建物は以前からあったが医師がいなくてしばらく閉鎖していた。当時は医師不足の時代でもあり、離島の診療所医師の確保はなかなか大変なときであっただけに、とりわけ西表島西部地区住民は大喜びであった。下田医師へ西表診療所を勧めたのは当時沖縄協会専務理事の吉田嗣延氏であった。下田医師は西表島へは行ったこともなければどういう島なのかも検討もつかないことから、一度西表島へ行き島の様子を知り、それから赴任するかどうか返事したいということを経由して吉田嗣延氏へ伝え西表島にやってきた。瀬戸弘竹富町長はわざわざ下田医師を案内して石垣より来島したほど熱の入れようであった。町議会議員、各地域公民館長はじめ、溢れんばかり

の地域住民が集まり、その晩、祖納公民館において歌三線踊りも披露され盛大に下田医師の歓迎会がもたれた。そして最後には瀬戸弘竹富町長自ら万歳万歳で称え歓迎会は閉会した。このような熱気あふれる歓迎ぶりに圧倒された下田医師は断るに断れずこうして西表に赴任することになったんですよ、と後日ニコニコ笑いながら話されたのが印象的であった。

その下田医師が所用にて東京へ行った折、宮内庁へ出向き当時の皇太子（平成天皇）へ面会した。西表島に生息する「金色ハゼ」の命名でも知られ魚類研究者である皇太子は、イリオモテヤマネコ保護についても関心を寄せていたことから、下田医師は知る範囲でヤマネコ保護について島の状況なども話をされたという。そのときに皇太子は、世界的動物学者、ライハウゼン博士（西ドイツ）の書いた「イリオモテヤマネコ保護についての提言」文書を下田医師へ託した。この文書は皇太子がイギリスへ行った折エジンバラ公へ会う機会があり、エジンバラ公はライハウゼン博士より託された「イリオモテヤマネコ保護についての提言」文書を皇太子へお渡ししたものであった。そして皇太子は下田医師へ・・・という経緯である。

そして診療所へ行った折、下田医師よりライハウゼン博士の「イリオモテヤマネコ保護についての提言」文書を頂いた。ところが英文なので良くわからず、たまたま我が家に居候して西表研究に取り組んでいた京都大学の研究者がいたので彼に英文で書かれたライハウゼン博士の「イリオモテヤマネコ保護について提言」文書を日本語へ翻訳をお願いしたものである。（別項参照）

読んでみると、ライハウゼン博士は西表島の奥深い人々の歴史を理解せず大いなる誤解をしていることがわかった。「ヤマネコ保護の為に西表島の全ての人々 1500 人は石垣島へ移住させてはどうか」などという提言には、さすがに開

いた口が塞がらなかった。世界的権威ある学者の提言だけに一大事であることからこのライハウゼン文書は地元メディアへも提供した。この提言はマスコミ&クチコミによりまたたく間に島中に知れ渡りヤマネコ論争の火に油をそそぐようなものとなった。さらにまたライハウゼン提言と関連するかのような記事が地元紙に掲載された。西表国立公園内にヤマネコ保護のため西表島鳥獣保護区を設定するという内容であるが、その説明会が何故か地元西表島ではなく石垣島において開催されたことから、これは何か怪しいというような疑いの目で見られた。

ヤマネコ保護をめぐり看過できないこのような動きに対して島の住民として黙っている訳にはいかないということから、心痛める有志が集まり「西表島鳥獣保護区設定反対町民大会」を西表小学校体育館で開催した。体育館はほぼ満杯状態であったことが住民の関心の高さを物語っていた。このような極めて不幸な状況から「怒り心頭」に、船浦港には「ヤマネコが大事か人間が大事か」という横断幕まで張られた。これは島の人々のことを理解しない学者&研究者そして行政に対する最大の皮肉を込めた抗議の意思表示であった。

新たな研究体制へ

このようなヤマネコを取りまく環境是最悪のものとなってしまったことから、これまでの研究体制の見直しが求められていた。琉球大学（池原貞雄先生）と九州大学（小野勇一先生）合同チームにより新しいヤマネコ調査研究が進められていくことになり、祖納公民館において地元住民を対象としたこれからのヤマネコ研究についての講演会が開催された。池原貞雄先生、小野勇一先生が紹介され新しい研究チームのスタートとなった。講演会では池原先生の穏やかな話ぶりがこれまでのヤマネコ研究に対するピ

リピリした雰囲気を変えることになった。私は池原先生のチームに入り協力することになった。西表島の山々を歩き主にヤマネコの痕跡（糞）を探すという調査であった。道なき山々の道案内役であるが、一番難儀をした仲間川ーゴザ岳ー波照間森ー白浜コースの調査について若干紹介しておきたい。

池原チームは6人、池原先生、そして当時琉球大学で池原先生の研究室学生だった坂口法明氏、他に学生含め3人、そして道案内人の私という調査団であった。ゴザ岳までは何度か登っているがそれから先、山々を縦断するコースは私も初めてであり池原先生も初めてだという。気に掛かっていたことは数年前の1979年に超大型台風5号が突風80メートル以上で吹き荒れ、その台風から数年しか経っていないことから、なぎ倒れた山々の木々はまだ朽ちておらず、道は塞がれ歩くだけでも困難を極めることが予想されていたからであった。出発前に池原先生へこのような状況が予想されることから、万が一山での野宿を最悪3泊は覚悟しておいた方がいいでしょう、ということをお話しておいた。

6人の3日間の食料も担ぎいよいよ出発となった。大富集落の船着場よりボートに乗って仲間川上流まで上り、そこで船を降りそれぞれ荷物を担ぎゴザ岳めざし山を登る。12月に入り冬の天候は曇り霧雨、大雨でないのが幸いであった。ゴザ岳中腹あたりまでは地元の人たちがカマイ（猪）獲りに山へ入っていることから道らしい道もあり少しは分かりやすい。

ゴザ岳山頂に登って驚いたのは山頂にしか生えないヤマンドイ（ゴザダケザサ）群落が無いことだった。どうやら先の台風5号で全滅したようであった。不思議に思いつつ小さな木々の下を見るとヤマンドイがまるでゴザを敷き詰めたようにびっしりと並んで枯れていた。その後にはトゥカチキ（シャリンバイ）その他木々などがびっしりと生えていて、山頂特有の植生ヤ

マンドイは絶滅しもう生えてこないものなのかなと思ったものだ。それから10年以上が経ちゴザ岳へ登る機会があった。何とヤマンドイは元の群落へと回復し、それを見たとき自然界のたくましさに驚いたものだ。このゴザ岳のヤマンドイは鉄のように固く百年も持ちこたえる程丈夫であることから、木造茅葺屋根の茅を載せるユチリ（えつり）として使用されてきた。その昔祖納の人々が仲良川流域の田んぼを耕作していたとき、仲良川よりゴザ岳まで登り山頂のヤマンドイを切り祖納まで運んだという。

そのゴザ岳を通過し先へと歩くが誰も歩いていないことから、これから先の道はないのを察した。ヤングラシ（山刀）で木々を切りながら1人歩ける程度の道を開けつつ進むという予想をはるかに超えた状況が続いていくことになった。かつて着工し中止となった「白浜ー大富間縦断道路計画」とほとんど同じ山の尾根沿いに歩くことになる。

1日目は道に迷い、幸いに元の道に舞い戻ることができ1泊する。池原先生が「そろそろここらあたりでテント張ろうか」と言う頃にはほぼ暗くなりかけていた。大急ぎでテントを張り取り急ぎ寝る準備をすませ、それから晩飯を炊こうとしても水がない、尾根伝いなので小さな川すらない。こういう場合はバリ（谷）を少しばかり降り湿気のある場所をヤングラシで穴を掘る。つまり小さな井戸を掘るのである。しばらくするとしみ込んだ水が溜まり、ご飯を炊き、お茶を飲む程度の水を確保できた。池原先生はお酒を飲まずコーヒーが大好きであった。多少コーヒー色した山の水で入れたコーヒーの美味さは格別で、西表島のジャングルで池原先生とコーヒーを飲みながらヤマネコ調査研究と保護、その他あれこれと話す機会に恵まれたことは、この上ない思い出として今も決して忘れることはない。

そのとき私が池原先生へお願いしたことは、



池原貞夫先生

これまでのような「ヤマネコか人間か？」という議論ではなく「ヤマネコも人間も共に生きる」という方向でヤマネコの調査研究・保護について考えるべきだということだった。「か」を「も」にたった一文字変えるだけでガラリと考え方が違うことになり住民の理解も得られるであろうと申し上げた。

12月の西表島のジャングルではピソ（ヒル）に取り付かれ、ある場所ではカマイが子供を産み育てる巣が10箇所ほどもあった。枯れ枝を並べてその上からシダなどの草をかぶせ雨が洩らないように頑丈に実に立派に作られている、まるでカヤ葺き屋のようである。カマイの巣はダニの巣でもあり、よくよく注意しなければダニに取り付かれひどい目に合う羽目になる。心配されたパブ（ハブ）は山奥では1匹も見ることにはなかった。こういう調査の機会もおそらくないであろう、という思いをしながら2晩山へ泊まり無事帰ることができた。

そして池原先生には各地での講演会のときにはぜひ「ヤマネコも人間も共に生きる」研究を

…と強調していただきたいことを何度も伝えたのが昨日のことのよう思い浮かばれる。

野生生物保護センター

ヤマネコ研究と保護活動拠点

1965年のイリオモテヤマネコ発見から30年目にして1995年西表島古見に環境省西表島野生生物保護センターが完成し、ヤマネコの調査研究&保護活動の拠点ができた。センター内部展示施設について紅露工房として少しお手伝いもしたことがあった。そのときなんとも不思議なこともあったので後々の為を書いておきたい。

内部施設は野村工芸沖縄が担当していたことから、展示について度々現場へ出向き打ち合わせしたり、出来るだけのお手伝いもしますので困ったことなどあれば遠慮なく相談してくださいと伝えてあった。担当は那覇より度々西表の現場へ来て仕事の進み具合など確認をしていた。

ある日担当がやって来て「どうも仕事がスムーズに進まない・・・この場所は何かあるんですか？」と聞いたので、私は「いや何もないですよ」とだけ答えておいた。それからしばらく経った頃、また飛んで来て「設置した展示が逆さまになったりやり直しばかりでおかしい」と困った顔していた。私は「焦らずにした方がいいですよ」とだけ返事をした。それから数日経った頃、また飛んできた。今回はいつもと様子が違う。仕事しているときふと見たら山の中から「白い顔が自分をジーと見ている」という。しかも真昼間のことである。ここは何かがあるのではありませんか？と深刻な顔つきであった。

予想だにしないこのような出来事もありこの古見村の歴史文化そして施設が建つこの場所について彼に話をすることにした。彼はたまたま仕事で沖縄島那覇から来ていたので古見村の歴史文化などについて全く知識もないのは当然で

もあった。

昼間の出来事のことであるが山からあなたをジューと見ていた白い顔は、実は「シロマタ神」だよ！と話しても彼には何のことか理解できるはずもない。西表野生生物保護センターの建つ場所は古見村のプーリ（豊年祭）のとき「アカマタとシロマタ」の神様が帰る特別神聖な山で、数百年に及んで神様によって守られてきた聖地なのである。明治政府により武力で琉球国は滅ぼされたことから明治36年に西表島古見村のこの聖地も日本国有地とされ現在に至っている。国有地であることから環境省はこの場所にヤマネコ研究施設をつくったのであろうが、つくる前に一番大事なことを忘れていたようだ。

それは「アカマタ神・シロマタ神」の許しを得ないままに工事を進めていたことから間違いばかりしていて「シロマタ神」は山の中から彼らをジューと見つめていたのだった。さすがに鳥肌もたち工事担当の彼へこう忠告した。今からでも遅くはない、「神様の許しを得るべく祈願」をするように告げた。祈願の仕方について、飾り物、供物など整えてこれまでの無礼はきちんと謝りウートー祈願するように話した。早速それらを整えて祈願したという。

それから何事もなく工事もうまく進み無事終わることができました、という報告を後日伺った。工事も無事終わり研究所が開所することとなった。研究所が開所して後からも古見村プーリには毎年必ず祈願のお酒&志など忘れずに神様へ奉納すること、「神が守ってきた聖地において研究する許しを得ること」により事故もなく研究も全てうまくいくようになる、ということを実際の環境省皆さんへは伝えておいたが果たして現在まで受け継がれているであろうか？

現在でも古見村プーリ行事期間中はそのエリアで仕事している環境省、林野庁職員はじめ全ての人々も聖地へ立ち入り禁止とされているのはそういうことに由来している。

ライハウゼン文書（日本語訳文）について

次に挙げるのはヤマネコ論争に大きな波紋となったライハウゼン文書「—Fact about Iriomote Island— イリオモテヤマネコの保護を」の全文である。これからのイリオモテヤマネコ調査&保護について考えていく上で欠かせないと思うので掲載しておく。

また、イリオモテヤマネコ研究保護にも関心をよせ、新石垣空港建設問題で白保の美しいサンゴ礁の海を守るために力を注いだイギリス王室エジンバラ公が今年4月99歳の天寿を全うされた。心からご冥福を祈り心より「うーどーどー合掌」。

— Fact about Iriomote Island —

イリオモテヤマネコの保護を

ポール・ライハウゼン

人口

1972年 2,000人

1977年 1,500人

（東部及び北部海岸線に沿って、北西部と東南部に人口の集中が見られる）集落は第2次世界大戦後、アメリカ人によるDDT処理によってマラリアが消滅してから後に生まれたものである。

動物相と植物相

動物相 かなりの大きさを持つ哺乳動物としてはイリオモテヤマネコとイリオモテコビトイノシシの二つだけで、どちらも西表島にしか見られないもので、保護を必要としている。又、両者とも古い形態を有している点で科学的にきわめて興味深いものである。

イリオモテヤマネコは1966年に至ってはじめて発見され、東京にある国立科学博物館の今泉博士によって初めて記載された。1967年にスタートし、調査と生態学研究は今泉博士と彼の

学生達の協力の下で6年の歳月をついやした。最初の調査の後、私はIUCNから日本政府あてに手紙をつきつけた。又私達は日本人大衆にある種の感動をひきおこすことができた。これらのことが原因となって日本政府はこのイリオモテヤマネコを天然記念物に指定し、島のほぼ3分の2をおおう地域を国立公園に指定した。そして調査促進資金を援助することを決定した。

ヤマネコの数 は 300 と推定された。最初の1年間の研究の後、我々はその数を150に引き下げて修正せざるを得なかった。現在数は最高で80、おそらく実際には40以下であると思われる。これらの数は、今泉博士の全詳述を日本の権威者に対して報告された3年半にわたる研究の結果に基づくものである。

減少の原因は(1)生息場所の破壊…ヤマネコは沼地の低地域と川や小川の周辺しか使用できない。なぜなら丘陵地帯にはえさになる動物が十分にいないからである。広範囲にわたる分析の結果驚いたことにはヤマネコの食べ物の主なものはクイナ類(オオバン、クロガモ)〔27頁〕であることがわかった。過去2ケ年の間に人口の減少にもかかわらず、これらの地域は広く耕作されてしまった。

(2)旅行者による妨害…島のちょうど中央部に一つの大きな河があり、年々増える旅行者によって踏みわけ道がつけられている。そして彼らの行動は全く抑制されていない。

(3)罠…多くの罠がイノシシのためにしかけられていて、ヤマネコも又この罠に捕えられている。この2〜3年で罠の数はいちじるしく増えているのに罠にかかるヤマネコは減っている。このことはヤマネコの数が更に減っていることを物語っている。

イノシシ 以前はSUS SCROFAの単なる亜種にすぎないと考えられていたが、今泉博士の詳しい研究によって、このイノシシが別箇の非常

に古い種のものであることが証明された。2年前、その数はおよそ600と推定された。当時は3人の免許をもった狩猟者と時々密猟する人がいただけだった。今日ではほとんど誰もが罠をしかけるようになっている。(曲げた若木にワイヤーの罠をくくりつけ、足をすくうとワイヤーが足のまわりをしめつけ、獲物を地上から空中にはねあげる仕組みのものである。)

学説では繁殖期にはイノシシは完全な保護をされていることになっているが、実際には何の処置もほどこされていない。同時に迫害者達は「有害獣」を殺すことを奨励する別の法律によってその権利を与えられている。現在残っているイノシシの数は誰も想像すら出来ない状態である。

しかし、すぐに断固たる措置をとらない限りあと2〜3年でイノシシが絶滅してしまうことは疑いのない事実である。

植物相 日本及び中国の自然にマレーの自然が混り、それと同時に八重山の個有のものさえある。本島は東南アジアにおける最後の自然のままのマングローブ帯を持っている。丘陵部は亜熱帯林におおわれている。

国立公園

前述の私達のはじめの頃の努力に応じて日本政府は島の約三分の二をおおう地域を国立公園化すると宣言した。しかし、日本では国立公園とはいくらか保護された単なる娯楽の場所にしか過ぎない。その上、北東部にただ1ヶ所残されている自然のままの常緑の原生林は国立公園に含まれていない。1975年までに地元民のやむことのない陳情の結果、国立公園の範囲は島の半分に減らされ、今年になってわずか3分の1に減らされた。残りの全ては、もし現在の計画が実行されるならば、製紙用の材木切り出しに用いられることに同意がなされ、その後は地元

民に解放されることになる。

残りの地域は景色の美しさのためにだけ選ばれたものであり、前述の川沿いの旅行者によって歩かれすぎて峡谷を除けば丘陵地帯なのである。このままではヤマネコの棲息地は全くなくなってしまいうだろうし、イノシシもほんとに少なくなってしまうだろう。

名目上保護されている地域にも全く何の監視もおかれていない。

3名の職員がいる山林管理事務所は隣の石垣島に設置されている。彼らの話しによれば、西表島には全く足を運ばないということである。それに彼らは興味を持っておらず住民を襲れている。県に対していくら文句を言っても、又現行の諸法規に明らかに違反していることがわかった場合でも完全に黙殺されているのである。

人間集団の有様

当初から島民はどのような種類の保護計画にも反対の態度を示していた。彼らは自らを開拓者と考えており、真の開拓者としての美德と悪徳の全てをもっている。つまり懸命に働き、その生活態度は慎しみ深いのが、向こう見ずで貧欲であり、開拓の破壊的側面についての正当な理解に欠けている。

動物相と植物相は彼らにとっては開拓の妨げという意味しか持っておらず、野生の保護などというのは馬鹿げたこととしか理解されていない。彼らは認識することができないし、又認識しようとしないうだろう。

例えばつまり現在計画されている山林伐採は、水源を完全に破壊し、現在でもぎりぎりの生活である彼らの生活基盤をも破壊するというような事実をである。

彼らはもっと多くの人口を引きつけることを望んでいる。(目標1万人)パイナップル等の輸出用果物を栽培し、軽工業を起こし(とは言え、島には原料は何もない。全てのものは何百マイ

ル、いや何千マイル以上も船で輸送されねばならなかったし、同じ道を再輸出されねばならない!)自らの文明を発展させ、特に良い近代的な学校のシステムを整備すること(自尊心に満ちた全ての日本人の両親にとって、子どもに最良の教育を受ける便宜を与えることは第一の要求なのである。)を望んでいる。現在のところ彼らの不満は子どもが少なすぎ、又先生も少なすぎることである。(小学生は60名しかいない)彼らは主張する。もしもっと人が居れば、もっと多くのより良い先生を、もっと安い個人負担で雇うことができるばかりか、税金の負担も全体的に低くなると。

理論上ではこれらのことは、全てそれ自身理にかなっているように見える。しかし、観光業(それもごく限られた範囲だけの)を除けば、西表島では実際には何もできないのであるから、彼らに出来ることは多くの人々と貧しさを分かちあうことだけである。また地質構造が非常にもろい岩石で風化も進んでいるから森林がなくなれば破滅的な溶脱がひきおこされる。すでにこの例をいくつも見る事ができる。

政治的情况

沖縄の人々は本当の日本民族ではなく、もし機会を与えられればおそらく独立の方へ投票するだろう。東京の中央政府と那覇の県庁の間にはどんな愛情もない。このことは現在の不適当な自然保護の法規でさえ、おおっぴらに無視され、県庁やその下の自治体に対してとった行動の一例を見てもわかる。

現実には、西表のような魅力に乏しい島に入植しなければならない理由はないし、戦前のような神聖な自然保全区として再び元にもどさなければいけないという理由もない。急速な発展途上にある隣の石垣島はやすやすと西表島から1500人を受け入れることができ、そこで彼らは、彼らが熱望している快適さと便宜とを享受

することができる。

勧告

- (1) 現行の保護法を強行すること。そのためには警察もしくは然るべき権力をもった森林保護部門を西表島に設置しなければならない。
- (2) 耕作されずに残っている地域は全て国立公園とすべきである。そしてその地域全域を保護地区にすること。今のところ旅行者の立入を禁ずること。
- (3) 全ての罟と狩猟行為は例外を除いてただちに禁止すること。例外とは過去2年間の内に逃げ出し野生化したヤギは射殺せねばならない。
- (4) 家畜としてのネコや犬を持ちこみ飼育することは最少限におさえるべきである。
- (5) 現在、大量の淡水を仲間川という島最大の川から汲み出して送水管ですぐそばの島（新城島）へ送っているが、それは観光のために開発され、すでに大きなホテルが立ちこの島には水がないせいである。この放水路は仲間川に沿ってあるマングローブをひどくおびやかす、破壊することであろう。この状況の適切な研究が必要である。
- (6) 中央政府は島への植民とこれ以上の開発を断呼として許可してはならない。
- (7) 更に政府は島を出ようとする住民に便宜を与え、その土地を買い上げるべきである。現在島に住んでいない個人や会社には土地を入手させないようにすること。
- (8) 現在ある全ての材木伐り出しについての認可契約は全て取り消されるべきである。
- (9) 島内に研究所を設置し、少なくとも1人以上の専従科学者と研究する場所と、一定の目的の研究を完了したなら交代する3人の臨時要員を置くこと。

島の全生物群は大変面白く、又特徴をもつも

のであるから、可能な限りその様子を十分に研究することが必要である。更に継続した科学的研究が他の何よりも実際の保証に寄与するものとなるであろう。願わくば、島に残る人々の態度も、又時とともに変われんことを。

結論

私は次のことを強調したい。慎重な研究と考察の結果、この島は余りに狭小で、その全部の生態系が余りに傷つきやすいため、数百人以上の人口が観光事業の食物調達やその保護を預かって共生して生きのびてゆくことはできないということが確認された。

農業と永遠に侵入し続ける人口とが両立しないことは、きわめてはっきりしている。このことは当初の2回の訪問まではまだ私の確信にはなっていなかったし、急速な農業の拡大の兆しもまだそれ程目立ってはいなかった。人口はすでに減少中で、私はその問題も静かに自ずと解決されてゆくだろうと期待していた。

しかし、2回目と今春（1977年）3回目の訪問の間の2ケ年間にすでに生じていた変化は、一つの厳しい衝撃として到来した。

私は今や、少なくとも一部では最少限の時間に最大の破壊を目的とした計画的な戦略が存在しており、いかに効果的防御的な法案を制定しようと企てた所で余りにも遅すぎ、それらがお手上げになるような絶望が生じ、「開拓者たち」は、それ以上の障害なしに彼ら自身の道を選ぶことができるようになることを確信している。

まだ救える。しかし、（それは）断固として今年から開始され、ひるむことなく続行されなければならない。

出典：金城朝夫「怒る！イリオモテヤマネコ ライハウゼン博士の勧告を批判する」(『青い海』1978年11月号)
※原文の漢数字は熟語等を除き算用数字に改めた。

石垣金星氏著作目録

本目録は、2022 年（令和 4）に開催された第 19 回西表島編専門部会、第 43 回編集委員会に提示した目録を土台にして作成したものです。2023 年に石垣金星氏の遺稿集『西表島の文化力—金星人から地球人へのメッセージ』（南山舎）が刊行されましたが、これに収録されている論文・論考（抜粋も含む）などは「→ 2023 年」と示しました。

1971 年

- ・「西表の人々の生活向上をめざしての私見」（『よなだ』〈1971 年 1・2 月号〉在沖西表青年会）

1973 年

- ・「西表島の叫び —失われゆく自然と文化—」（『青い海』〈通号 27 号〉青い海出版社）→ 2023 年
- ・「西表でも観察される —「ズグロミソゴイ」—」（『八重山毎日新聞』1973 年 11 月 2 日）
- ・「「ズグロミソゴイ」西表でも観察される」（『八重山毎日新聞』1973 年 12 月 2 日）
- ・「姿を見せたヤマシギ —幻の鳥ヤンクイラ—」（『八重山毎日新聞』1973 年 12 月 9 日）
- ・「組踊り「忠臣身替り」—過疎化の西表で継承される—」（『八重山毎日新聞』1973 年 11 月 25 日）

1976 年

- ・「食いものにされた西表島—島興しにかける若者たち—」（『新沖縄文学』〈第 32 号〉沖縄タイムス）→ 2023 年

1979 年

- ・「シッポをふらず土地を見直せ」（新里金福編『沖縄評論』〈第 5 号〉沖縄評論社）
- ・「琉球弧・市民住民運動連帯集会第三部 島

おこし・文化運動報告 西表島のシマおこし運動」（『琉球弧の住民運動』〈第 8 号〉CTS 阻止闘争を拓げる会）

1980 年

- ・「手仕事の生産・流通センター『紅露（クール）工房』完成間近」（『琉球弧の住民運動』〈第 12 号〉CTS 阻止闘争を拓げる会）→ 2023 年
- ・「下田医師事件『女の闘い』」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1980 年 5 月 11 日）→ 2023 年
- ・「シマづくりの唄」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1980 年 8 月 24 日）→ 2023 年
- ・「シマおこし運動」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1980 年 9 月 28 日）→ 2023 年
- ・「ねらわれたシマ」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1980 年 12 月 7 日）→ 2023 年

1981 年

- ・「シマぐにの復権—自立の思想を求めて—」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1981 年 1 月 18 日）→ 2023 年
- ・「地域開発と自然保護」（『八重山毎日新聞』『日曜随筆』欄 1981 年 2 月 22 日）→ 2023 年
- ・「独立宣言!」（『沖縄タイムス』『唐獅子』欄 1981 年 7 月 11 日）→ 2023 年
- ・「琉球弧住民運動交流合宿（一九八一年）」（『沖縄タイムス』『唐獅子』欄 1981 年 8 月

8日)→2023年

- ・「イクサへの道」(『沖縄タイムス』「唐獅子」欄 1981年12月12日)→2023年
- ・「シマの「ゆたかさ」を求めて—西表シマおこし運動のめざすもの—」(『青い海』〈第99号〉青い海出版社)
- ・「起て! ウチナーぬ二才達—島は若者のエネルギーをまっている—」(『青い海』〈第108号〉青い海出版社)

1982年

- ・「〈座談会〉自主・自立の民衆運動の創出にむけて(上)—金武湾・西表島のシマおこし運動—」(『琉球弧の住民運動』〈第19号〉CTS阻止闘争を拡げる会)
- ・「〈座談会〉自主・自立の民衆運動の創出にむけて(下)—金武湾・西表島のシマおこし運動—」(『琉球弧の住民運動』〈第20号〉CTS阻止闘争を拡げる会)
- ・「新石垣空港と大型ホテル」(『琉球新報』「論壇」欄 1982年4月22日)→2023年
- ・「パラング」(『沖縄タイムス』「唐獅子」欄 1981年5月14日)
- ・「ヤマネコも人間も」(『沖縄タイムス』「唐獅子」欄 1981年6月14日)→2023年
- ・「怒れ唐獅子」(『沖縄タイムス』「唐獅子」欄 1981年6月29日)→2023年

1983年

- ・「安東丸事件」(『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社)→2023年
- ・「西表島」(『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社)
- ・「波照間森」(『沖縄大百科事典』〈下巻〉沖縄タイムス社)
- ・「『唐獅子』から」(『リュウキュウネシア』〈第3号〉)

1984年

- ・「イモ、西表シルク、アカマイ、ひらつか農法」(『リュウキュウネシア』〈第4号〉)

1987年

- ・「西表の歴史の可能性—地域づくりの活動の中で歴史・文化をどう考えるか—」(『地域と文化』〈第40・41合併号〉南西印刷出版部)→2023年

1988年

- ・「シマの「ゆたかさ」を求めて—西表シマおこし運動のめざすもの—」(『青い海』〈通巻99号〉青い海出版社)
- ・「米作り狂言—創作方言劇—」(『地域と文化』〈第48号〉南西印刷出版部)
- ・「西表・スネシマ発掘調査へのおさそいラブレター」(『地域と文化』〈第48号〉南西印刷出版部)
- ・「大竹ウガンの神と首里王府について」(『地域と文化』〈第48号〉南西印刷出版部)→2023年

1989年

- ・「稲葉川一人と自然との関わり—」〈仮題〉(『地域と文化』〈第53・54合併号〉南西印刷出版部)→2023年

1990年

- ・「西表の道」(『沖縄県歴史の道調査報告書(Ⅶ)—八重山諸島の道—』沖縄県教育委員会)

1991年

- ・「西表における造船に関する伝承」(『沖縄県文化財調査報告書 第101集 船浦スラ所跡—港湾施設用地工事等に伴う発掘調査—』沖縄県教育委員会)→2023年

- ・「文献からみた祖納の歴史 ―上村遺跡を中心として―」（『沖縄県文化財調査報告書 第98集 西表島上村遺跡 ―重要遺跡確認調査報告―』沖縄県教育委員会）→2023年
- ・「編集後記」（842~845頁）（記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌 西の子』竹富町立西表小学校）→2023年

1993年

- ・「西表の島おこし運動―島の恵みに生かされた地域づくり―」（『復帰20年この人―35人が語る沖縄―』NHK沖縄放送局）

1994年

- ・共著『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ』（西表島エコツーリズム協会）

1995年

- ・『南の島を旅する 沖縄自然フィールドガイド―子どもとはじめる自然〈冒険〉図鑑10―』（岩波書店）花井正光と共著。

1997年

- ・金城透と共著「慶来慶田城時代の西表島」（『文化課紀要』〈第13号〉沖縄県教育委員会）
- ・「ディンサー節の故郷上原」（『八重山日報』1997年11月7日-10日）
- ・「八重山の芸能の「神力」」（『光扇会 新城知子・音絵二人会―アトリエ游企画游舞台東京公演―』〈パンフレット〉アトリエ游）

1999年

- ・「ディンサー節の故郷上原―竹富町デンサー節大会についての提言―」（1-5）（『八重山毎日新聞』1999年10月13日-1999年10月14日-10月18日）→2023年

2000年

- ・「西表島から島おこしを考える」（『地域開発』〈第425号〉）→2023年

2001年

- ・「西表島総合調査にあたって」（『西表島調査報告―自然・考古・歴史・民俗・美術・工芸―』沖縄県立博物館）
- ・「西表島・鳩間島及び新城島における動植物の方言名について」（共著）（『西表島調査報告―自然・考古・歴史・民俗・美術・工芸―』沖縄県立博物館）

2002年

- ・「北国に生きた南国の女性」（『真壁仁研究』〈第3号〉）
- ・「〈誘い〉アイヌ民族芸能公演 in 八重山―北国アイヌモシリの兄弟を迎えて―」（『八重山日報』2002年1月11日）
- ・「沖縄県西表島―西表島・エコツーリズムのめざすもの―」（『生涯フォーラム』〈第1203号〉社会教育協会）

2003年

- ・「インタビュー 石垣金星さん・昭子さんに聞く 島の暮らしそのものが宝」（『母の友』〈第602号〉）
- ・「神々の島に舞いおりた厄病神」（藤原良雄編『琉球文化圏とは何か』〈別冊『環』6〉藤原書店）

2006年

- ・『西表民謡と工工四』（西表をほりおこす会）→2023年
- ・「ばがけーらぬ命島とう伴に（我らの命島と伴に！！）」（『いのちの叫び』藤原書店）

2007年

- ・「西表島をほりおこす―西表と私の戦後史

一」(『環』〈第30巻〉藤原書店)→2023年

2008年

- ・「〈インタビュー〉西表、リゾート開発との闘いー自然と共にある生産の場をめざしてー」〈石垣金星・石垣昭子・岡本由希子〉(『季刊 新沖縄フォーラム けーし風』〈第61号〉フォーラム刊行会議)→2023年
- ・「西表通信① 悪徳企業ユニマツト告発」(『うるまネシアー特集 ちゃーすが沖縄ー』〈第9号〉21世紀同人会)

2009年

- ・「八重山ー400年目の西表島近況ー」(『薩摩支配400年 琉球処分130年を問う』薩摩支配400年 琉球処分130年を問う会)

2010年

- ・松島泰勝と共著「琉球自治共和国連邦独立宣言」(『うるまネシアー特集 さよならニッポン・環我琉球ー』〈第11号〉21世紀同人会)
- ・「しまくとうばシンポに寄せてーまだ遅くはない 島の歴史と文化 後世にー」(『琉球新報』2010年9月15日)
- ・共著『西表島・宇多良炭坑 萬骨碑建立記念誌』(萬骨碑建立期成会)

2011年

- ・「西表通信」(『うるまネシアー特集 琉球ちむぐくる共同体ー』〈第13号〉21世紀同人会)
- ・「「琉球自治共和国連邦独立宣言」をなぜ発したか」(『「沖縄問題」とは何かー「琉球処分」から基地問題までー』藤原書店)
- ・「巻頭言」「式辞」(西表小学校創立120周年記念事業部編『西表小学校創立120周年記念誌』竹富町立西表小学校)

2012年

- ・「西表島：リゾート開発と自治・経済・環境問題」(『琉球列島の環境問題ー「復帰」40年持続可能なシマ社会へー』高文研)
- ・「西表から見える琉球の姿」(『うるまネシアー特集 それぞれの「復帰40年」ー』〈第14号〉21世紀同人会)

2013年

- ・『西表島の民謡』〈平良彰健と監修〉(西表島エコツアーリズム)
- ・「2013年巳年『琉球独立』実りの年へ！」(『うるまネシア』〈第15号〉21世紀同人会)
- ・「与那国と西表の交流史」(与那国町史編集委員会事務局編『与那国町史 第三巻 「歴史編 ー与那国島 黒潮の衝撃波 西の国境 どうなんの足跡ー』与那国町)

2014年

- ・「神々の島に舞いおりた厄病神」(『琉球文化圏とは何か』〈別冊 環6〉藤原書店)
- ・「平和のキーステーションに」(『環』〈第56巻〉藤原書店)
- ・「アリが象を倒す！ー八重山教科書問題ー」(『季刊 新沖縄フォーラム けーし風』〈第83号〉新沖縄フォーラム刊行会議)
- ・「〈シンポジウム〉琉球民族独立総合研究会・設立記念シンポジウム(新川明、石垣金星、安良城米子、宮里護佐丸)」(『琉球独立研究』〈創刊号〉琉球独立総合研究学会)

2015年

- ・「西表・祖納から考えるーわれわれ「琉球人」とは誰か？ー」(『N27』〈第4号〉新星出版)→2023年
- ・「八重山の平和を考える」(『月刊 琉球』〈No. 29〉琉球館)
- ・「八重山教科書採択問題を問う!!」(『「アジア」

を考える―2000-2015―』藤原書店)

- ・「肝心と力を合わせば道は拓かれる」(『環』〈第60巻〉藤原書店)

2022 年

- ・「首里城、再建へ」(『復帰 50 年の記憶 沖縄からの声』藤原書店) → 2023 年
- ・「上勢頭昇氏の思い出」(『竹富島 上勢頭昇の軌跡』) → 2023 年

2023 年

- ・著 / 石垣金星、企画 / 石垣昭子、編 / 西表をほりおこす会編集部『西表島の文化力―金星人から地球人へのメッセージ』(南山舎)

琉球大学名誉教授 西里喜行先生を悼む

竹富町史編集委員会委員長

石 垣 久 雄



西里喜行先生は、1989年竹富町史編集委員会の発足では初代副委員長として、また委員として竹富町史編集に長年携わっていました。先生の訃報は、竹富町史編集係長から知らされました。訃報に「え」となったことを覚えています。先生が亡くなる4日ほど前に長時間にわたり電話で竹富町の島々にある文化遺産の保存活用、島々の博物館の構想等々についてお話しをしました。当然、この時が最後になると知る由もありませんでした。

先生は竹富町竹富島の出身です。戦後はご存じのように食糧難、戦後マラリアがあり文化生活の欠乏時代でした。このような中、西里少年は家族を支える生産人として石ころの畑を耕し、島周辺の海から魚や貝を取り生活をしていました。

竹富の同級生は「彼は冒険王という本を片っ端から読みあさるほど読書が好きな一面があり、学業はいつも成績上位で優等生でした」と言います。

先生にも恵まれ、島出身の上間力教員は1959年中学生の西里少年に手紙を送りました。手紙の一部には「自分という存在はこの宇宙にただ一つしかない自分を一番愛さなければならない。そのためには正義と勇気と愛が必要だ。他人が嗤おうが決してそれに負けるな。これからが大事だ。ウンと頑張れ！」と激励しています。

西里少年は中学3年生の時、沖縄本島に引っ越し、那覇高校から京都大学に進学して、京都大学大学院文学研究科博士課程（東洋史学専攻）を経て、那覇市史編集室、1972年琉球大学教育学部助教授、83年同教授に就任しました。

琉球所属問題を扱った『清末中琉日関係史の研究—琉球所属問題始末—』（京都大学学術出版会、2005年）、琉球王府の外交文書『歴代宝案』の編纂事業等、ご存じのとおり業績は著しく、多忙な毎日を過ごしていました。

竹富町史編集委員会として、印象深い出来事は多くありますが三つ記します。

一つ目に編集作業において戦争体験記録を扱ったときです。戦争体験記のAさんの一文が事実と反するという意見の相違が生じました。副委員長の西里先生は、解決のために当事者の主張に誠意をもって、粘り強く対応することで進めることができました。

二つ目に『竹富町史だより』21号および22号に掲載された「西塘とその時代」論争—西里・狩俣往復書簡—です。1500年の「アカハチ戦争」は八重山の歴史を大きく変えました。それから500年後の2000年頃からさまざまな視点による八重山の歴史における見直しの試みがありました。この「西塘とその時代」論争もその一環と言えます。西塘の伝承と史実の関係を考える時、歴史的転換であっ

た 1500 年アカハチ戦争、1609 年薩摩島津軍の侵攻、1879 年琉球処分、1945 年沖縄戦（八重山戦）および 1972 年日本復帰等をあげ、その歴史的転換の諸契機は竹富島を含む八重山社会をその都度大きく変容させた事実を考えなければならないと、西里・狩俣の書簡上での論争は続いています。お二人の書簡論争は、歴史や伝承などの諸史資料の扱いは客観的でなければならないとして、その後の各市町村史の編集に大きな影響を及ぼしました。

三つ目に町民参加の町史の作られ方として、西里先生は私たちの住む行政区は大小 160 の島を有する沖縄県、そして 16 の島を有する竹富町です。われわれは島に住み生計を立てています。先人が育んだ文化遺産を引き継ぎ発展させ、豊かな未来を築くべく日々、営々と努力しています。島の文化とじかに接することができる施設、加えて島の文化を広く紹介する努力が必要です。島にはその島の文化を知る多くの文化財が残っています。これらを守り抜くために協力するのが島民であり、記録、紹介するのが町史編集委員会の仕事です。

西里先生はその他にも災害史、郷友会編、自然編などの編集にも情熱を燃やしていました。これまでの業績を踏まえて、これら情熱の源は、戦後苦しい中、幼少期に見た島人たちが助け合い、励まし合う温かさ、お互いに生きるための方策と真剣になるたくましさ、そしてその中で生まれた文化を早く具現化したいとの思いがあったと推察します。

誠実で粘り強い人柄の西里喜行先生とご一緒に仕事できたことに感謝して、竹富町史をはじめ数々のご功績に敬意を表します。安らかにお休みください。

追悼 西里喜行先生

沖縄国際大学名誉教授

狩 俣 恵 一

琉球大学名誉教授の西里喜行先生は、令和6年（2024）2月2日、85歳でご逝去された。先生は私と同じ竹富島生れであるが、私が幼少の頃島を出られたので、先生の知己を得たのは「西塘考」（琉球大学教育学部紀要〈第32集〉、1988年）という論文からであり、当時東京竹富郷友会のリーダーであった故阿佐伊孫良さんを介してであった。

その後、先生から札幌の拙宅にご質問のお手紙が届き、オヤケアカハチ戦争前後の八重山についてやり取りをするようになった。先生は『球陽』『琉球国由来記』『朝鮮王朝実録』等の歴史資料をもとに、当時の八重山を西表島勢力圏と石垣島勢力圏に区分し、西表勢力圏は宮古との交渉ルートを持っていたと考えておられた。一方、私はユングトゥ・ユンタ・ジラバ・伝説・昔話・芸能の詞章をもとに古琉球や近世琉球の八重山の社会について考えた。その往復書簡は「西塘とその時代論争—西里・狩俣往復書簡—」として、『竹富町史だより』〈第21号〉〈第22号〉（2002年）に掲載していただいた。

私の力量不足や書簡という性格もあって、先生にとっては不十分な論争であったと思われる。が、記録資料中心の歴史学に加えて民俗学を活用することは、沖縄及び八重山の歴史を豊かにする。と同時に、近代史学が導入される以前の庶民史は、伝承の中にあったとの共通認識を得ることとなり、『竹富町史 島々編』に「歴史と伝承」の章を設ける契機となった。

また、先生は、全国竹富島文化協会主催のシンポジウムの基調講演で、「西塘」をテーマにお話された。その内容は、「アカハチ戦争後の八重山は、宮古の仲宗根豊見親トウイミキョーの次男の祭金豊見親マツイリガニ、三男の知利真良豊見親チリマラ、首里王府から派遣された満挽与人マンビキユンチュが八重山を統治し、その後西塘は帰郷してカイジに蔵元を置いて八重山の頭職に就いた」（『星砂の島』〈第6号〉、2002年）と述べ、西塘の帰郷年と石垣島への蔵元移転に強い関心を示された。

そのシンポジウムでは、真栄里泰山沖縄大学客員教授（第57代沖縄竹富郷友会会長）が、「西塘の八重山統治は政治的には成功しながらも、石垣に園比屋武御嶽のような琉球王府の神を安置し得ず、八重山の神々の琉球への精神的な統合は、後世の歴史にゆだねなければならなかった政治問題があったのではないか。琉球王国に統合された八重山には西塘において終わることのなかった淵の深さがあり、それはなおも沖縄のアイデンティティーに関わる課題としてあるのではないかと思うのです」（『星砂の島』〈第6号〉）と述べられたことに同意され、沖縄の政治問題をはじめ、さまざまな問題を克服するには、前提としての島々村々の特性について考えるべきであり、首里城を核とした琉球沖縄の思想を検討する必要性を説かれた。その見解は先生の庶民目線の歴史観であったと思われる。

『火難の首里城』（インパクト出版会、2024年）のご執筆を依頼したときも、先生は「首里城が火災に遭ったことで、ウチナーンチュは、沖縄のアイデンティティーの重要な象徴が首里城であることに改めて気付いたと思われる」と話され、本書の「歴史学の視点から見た大龍柱の向き」で

もそのことについて述べている。要するに、沖縄の各地域が主体となって、琉球王府との関係性を考えることを通して首里城が正真正銘の県民の象徴になると考えておられたのである。

先生は〈琉球処分〉の歴史用語を改めて〈廃琉置県〉とされた。〈廃琉置県〉の造語は、松田道之編『琉球処分』に記された「琉球藩ヲ廃シ沖縄県ヲ置キ」（下村富士夫編『明治文化資料叢書 第四巻 外交編』風間書房、一九六二年、159 頁）によると思われる。先生に造語の真意を伺ったことはないが、鳥越皓之先生（沖縄県今帰仁村生れ、早稲田大学名誉教授、父は宗教史・歴史学の鳥越憲三郎氏）から「沖縄は何も悪いことをしていないのに、なぜ処分されないといけないのか」という見解を伺ったとき、〈廃琉置県〉の造語も、先生の庶民目線の琉球沖縄の歴史観が生み出したものであると考えるようになった。

先生は『歴代宝案』の研究をはじめ、琉中関係の著名な歴史学者であったが、そのお忙しい中、沖縄竹富郷友会の第 61 代会長をつとめられた。ただし、それは〈愛郷心の強さ〉という言葉では不十分である。先生の庶民目線の学問が生み出した〈愛郷心〉だったからである。合唱。



「西塘とその時代」論争—西里・狩俣往復書簡—

『竹富町史だより』〈第 21 号〉（2002 年 3 月）・〈第 22 号〉（同 9 月）掲載

西里喜行氏著作目録

本目録は、西里喜行氏の編著作物を「1. 著書目録」「2. 共編著書目録」「3. 論文・論考目録」に分類して構成し、発行年順に掲げました。1 年のなかで発表順が前後するところがあることを予め断っておきます。

1. 著書目録

1981 年

- ・『論集 沖縄近代史 ―沖縄差別とは何か―』（沖縄時事出版）
- ・『沖縄近代史研究 ―旧慣温存期の諸問題―』（沖縄時事出版）

1982 年

- ・『バウン号の苦力反乱と琉球王国 ―揺らぐ東アジアの国際秩序―』（榕樹書林）→2001 年
- ・『近代沖縄の寄留商人』（ひるぎ社）

1990 年

- ・『冊封体制の解体と清末知識人の東アジア認識 ―台湾・琉球・越南・朝鮮問題を通して―』（琉球大学教育学部社会学科・科研費報告書）

1992 年

- ・『沖縄研究資料 13 琉球救国請願書集成』（法政大学沖縄文化研究所）

2001 年

- ・『バウン号の苦力反乱と琉球王国 ―揺らぐ東アジアの国際秩序―』（榕樹書林）

2005 年

- ・『清末中琉日関係史の研究』（京都大学学術出

版会）〈第 33 回伊波普猷賞〉

2006 年

- ・『私の歴史学研究四〇年（備忘録）―伊波普猷賞受賞記念講演・琉球大学在職最終講義―』（私家本）

2. 共編著書目録

1991 年

- ・共訳書『中国・琉球交流史』〈著／徐恭生、訳／西里喜行・上里賢一〉（ひるぎ社）

1996 年

- ・『歴代宝案校訂本 第 13 冊』（沖縄県教育委員会）

2002 年

- ・『歴代宝案訳注本 第 13 冊』（沖縄県教育委員会）

2004 年

- ・安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行『沖縄県の歴史』（山川出版社）

2010 年

- ・安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西

里喜行『沖縄県の歴史』[第2版](山川出版社)

2012 年

- ・『歴代宝案校訂本 第14冊』(沖縄県教育委員会)

2014 年

- ・西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球關係史料集成』〈第2巻〉(國立臺灣大學圖書館)

2016 年

- ・西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球史關係料集成』〈第3巻〉(國立臺灣大學圖書館)
- ・『歴代宝案校訂本 第15冊』(沖縄県教育委員会)

2017 年

- ・西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球史關係料集成』〈第4巻〉(國立臺灣大學圖書館)

2018 年

- ・西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球史關係料集成』〈第5巻〉(國立臺灣大學圖書館)
- ・『歴代宝案訳注本 第14冊』(沖縄県教育委員会)

2022 年

- ・『歴代宝案訳注本 第15冊』(沖縄県教育委員会)

3. 論文・論考等目録

1967 年

- ・「清末の寧波商人について —「浙江財閥」の成立に関する一考察—」〈上〉〈下〉(『東洋史研究』〈第26巻第1号〉〈第26巻第2号〉東洋史研究会)

1969 年

- ・「歴史の眼 沖縄「三大選挙」の歴史的意義」(歴史科学協議会編『歴史評論』〈第221号〉校倉書房)

1970 年

- ・「祖国復帰運動史の総括と教訓 —沖縄における七〇年代闘争の展望のために—」(歴史科学協議会編『歴史評論』〈第238号〉校倉書房)
- ・「沖縄近代史における本島と先島」(沖縄歴史研究会編『近代沖縄の歴史と民衆〈沖縄歴史研究別冊〉』沖縄歴史研究会)

1971 年

- ・「沖縄における「反復帰論」とその周辺 —〈沖縄〉をめぐる思想とその状況—」(『民主文学』〈第70号〉日本民主主義文学会)

1972 年

- ・「沖縄地域史研究における時代区分」(『沖縄文化論叢』〈1〉平凡社)

1977 年

- ・「沖縄近代史における本島と先島 —「差別」の構造と克服主体の形成—」(沖縄歴史研究会編『近代沖縄の歴史と民衆』[増補改訂版] ぺりかん社)
- ・「謝花昇と沖縄民権運動に関する一考察(Ⅰ)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部』第21集) 琉球大学教育学部)
- ・「沖縄近代史研究の視点と論点 —安良城盛昭氏の問題提起に寄せて—」(『沖縄タイムス』1977年8月23日—9月8日)

1979 年

- ・「沖縄近現代史研究序説(1)「旧慣温存期」の諸問題」、「沖縄近現代史研究序説(2)「上からの改革」と近代沖縄」(『琉球大学教育学部紀要 第一部』〈第 23 集〉琉球大学教育学部)

1980 年

- ・「書評 三木健著『八重山近代民衆史』」(『青い海』〈通巻 93 号〉青い海出版社)

1983 年

- ・「大坪岩次郎」「沖縄織工場」「開港維新会」「鹿児島郵船(株)」「川畑黙志」「勸業資金」「旧慣廃止運動」「球陽丸」「寄留商人」「広運丸」「古賀辰四郎」「塩谷清兵衛」「土族授産事業」「大有丸」「中馬辰次郎」「永江徳志」「賄女」「丸一商店」「丸岡莞爾」「宿引女」「山之内喜左衛門」「予算協議会」(沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社)

1984 年

- ・「東アジア世界史研究の視点・方法・論点 ―諸説の検討―」(『琉球大学教育学部紀要 第一部』〈第 27 集〉琉球大学教育学部)
- ・「在東京琉球藩邸投書事件考 一日中同祖論者の琉球処分反対論をめぐって―」(『地域と文化』〈第 28 号〉ひるぎ社)

1985 年

- ・「琉球処分前夜の通貨問題 一文替り考―」(山本弘文先生還暦記念論集刊行委員会『琉球の社会と文化 ―山本弘文先生還暦記念論集―』本邦書籍)
- ・「中国における洋務運動研究の歴史と現状」(『琉球大学教育学部紀要 第一部』〈第 28 集〉琉球大学教育学部)

1986 年

- ・「前近代における琉球の対外関係と自己意識・国家意識」(『沖縄と東アジア・東南アジア間の国際交流の歴史と展望に関する学際的研究』琉球大学法文学部)
- ・「苦力貿易とロバート・バウン号事件 ―福建師範大学におけるシンポジウムへの基調報告―」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 29 集〉琉球大学教育学部)
- ・「琉臣殉義事件考 ～林世功の自刃とその周辺～」(島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清三先生古稀記念論集刊行委員会編『球陽論叢』ひるぎ社)
- ・「東アジア世界の中の琉球 ―その自己意識と国際意識の形成史―」(琉球大学公開講座委員会編『琉球大学放送公開講座 1 国際化時代と生涯教育―大学の原点と地域社会の連携を考える―』琉球大学)
- ・「解説 歴代宝案文書の様式と構成」(『那覇市史 資料篇第 1 巻 4 歴代宝案第 1 集抄』那覇市役所)

1987 年

- ・「琉球救国運動と日本・清国」(『沖縄文化研究』〈13〉法政大学沖縄文化研究所)

1988 年

- ・「西塘考 ―西塘の生涯に関する若干の問題―」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 32 集〉琉球大学教育学部)

1989 年

- ・「前近代琉球の自己認識と国際意識」(島袋邦編『地域からの国際交流』研文出版)
- ・「李鴻章と向徳宏(幸地朝常) ―琉球分島問題をめぐって―」(『第 2 回琉中歴史関係国際学術会議論文集』琉中歴史関係国際学術会議実行委員会)

1990 年

- ・「台湾事件(1871-1874)と清国ジャーナリズム(資料編 4)」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 36 集〉琉球大学教育学部)
- ・「洋務派外交と亡命琉球人(1) 琉球処分問題再考」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 36 集〉琉球大学教育学部)
- ・「洋務派外交と亡命琉球人(2)・琉球処分問題再考」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 37 集〉琉球大学教育学部)

1991 年

- ・「琉球王国評定所文書(一四九八号文書)解題」(『琉球王国評定所文書』〈第 6 巻〉浦添市教育委員会)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 1)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 38 集〉琉球大学教育学部)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 2)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 39 集〉琉球大学教育学部)
- ・「清末のジャーナリズムと琉球問題—廃琉置県の前後—」(『第 3 届中琉歴史関係国際學術會議論文集』中琉文化経済協会)

1992 年

- ・「琉球処分と樺太・千島交換条約」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『地域と民族(エトノス)』〈アジアのなかの日本史 4〉東京大学出版会)
- ・「牟安世著『洋務運動』〈上〉」(金城正篤と共訳)(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 40 集〉琉球大学教育学部)
- ・「牟安世著『洋務運動』〈中〉」(金城正篤と共訳)(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 41 集〉琉球大学教育学部)

1993 年

- ・「官生の歴史と生活」(池宮正治・小渡清孝・田

名真之編著『久米村 一歴史と人物—』ひるぎ社)

- ・「解説」(『沖縄縣人事録 復刻版』ロマン書房本店)
- ・「牟安世著『洋務運動』〈下〉」(金城正篤と共訳)(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 42 集〉琉球大学教育学部)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 3)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 43 集〉琉球大学教育学部)

1994 年

- ・「清国(洋務派)の対日外交と琉球問題 一分島・均露条約の調印回避以後—」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 45 集〉琉球大学教育学部)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 5)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 45 集〉琉球大学教育学部)
- ・「冊封体制崩壊の諸問題—琉球問題を中心に—」(『沖縄文化の源流を探究』復帰 20 周年沖縄研究国際シンポジウム実行委員会)

1995 年

- ・「清代光緒年間の〈琉球国難民〉漂着事件について—救国運動との関連を中心に—」(『第 2 回琉球・中国交渉史シンポジウム』沖縄県立図書館)
- ・「ロバート・バウン号事件再考—東アジア国際秩序再編の一契機として—」(琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』〈第 11 巻〉浦添市教育委員会)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 6)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 46 集〉琉球大学教育学部)
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム(資料編 7)」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 47 集〉琉球大学教育学部)

1996 年

- ・「琉球＝沖縄史における『民族』の問題 ―琉球意識の形成・拡大・持続について―」（『新しい琉球史像―安良城盛昭先生追悼論集―』榕樹社）
- ・「黄遵憲の「流求歌」と琉球認識（試論）―馬兼才（与那原良傑）との交流を背景として―」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 48 集〉琉球大学教育学部）
- ・「琉球国運動関係史料（一）―清国亡命企謀者の訊問調書―」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 49 集〉琉球大学教育学部）
- ・「琉球問題と清国ジャーナリズム（資料編 8）」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 49 集〉琉球大学教育学部）
- ・「毛鳳来（富川盛奎）の清国亡命事件とその周辺 ―新たな救国願書の紹介を兼ねて―」（『第 5 届 中琉歴史関係国際學術會議論文集』福建教育出版社）
- ・「文化協会設立に寄せて 竹富島の文化を世界の人々と共有しよう」（『星砂の島』〈創刊号〉全国竹富島文化協会）
- ・「島のうつりかわり（1）―遺跡と英雄伝説の時代―」（『星砂の島』〈創刊号〉全国竹富島文化協会）

1997 年

- ・「島のうつりかわり（2）―西塘とその時代―」（『星砂の島』〈第 2 号〉全国竹富島文化協会）
- ・「中琉交渉史における土通事と牙行（球商）」（『琉球大学教育学部紀要』〈第 50 集〉琉球大学教育学部）
- ・「琉球国運動関係史料（二）―清国亡命企謀者の訊問調書―」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 51 集〉琉球大学教育学部）
- ・「琉球分割交渉とその周辺」（琉球新報社編『新琉球史』〈近代・現代編〉琉球新報社）
- ・「年次解説 昭和九年―昭和十三年」（『竹富町史 第十一巻 新聞集成Ⅲ』竹富町）

- ・「那覇市史編集事業の拡大と外間政彰さん」（外間政彰追悼文集刊行委員会編『爽風一過』外間政彰追悼文集刊行委員会）

1998 年

- ・「琉球救国運動関係史料（三）―明治政府の取締関係文書―」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 52 集〉琉球大学教育学部）
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム（資料編 I）」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 53 集〉琉球大学教育学部）
- ・「島のうつりかわり（3）―人頭税の時代―」（『星砂の島』〈第 3 号〉全国竹富島文化協会）

1999 年

- ・赤嶺守・西里喜行「第 7 回琉中歴史関係国際學術會議参加報告」（『歴代宝案研究』〈第 10 号〉沖縄県教育委員会）
- ・「清末のジャーナリズムと琉球問題（3 編）―日清再交渉の時期―」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』〈第 54 集〉琉球大学教育学部）
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム（資料編 II）」（『琉球大学教育学部紀要』〈第 55 集〉琉球大学教育学部）
- ・「島のうつりかわり（最終回）―「大和世」の時代―」（『星砂の島』〈第 4 号〉全国竹富島文化協会）

2000 年

- ・「土通事・謝必震とその後裔たち ―中琉交渉史の一側面―」（『第 6 届中琉歴史関係學術研討會論文集』、中国第一歴史档案館）
- ・「冊封進貢体制の動揺とその諸契機 ―嘉慶・道光期の中琉関係を中心に―」（『東洋史研究』〈第 59 巻第 1 号〉東洋史学会）
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム（資料編 III）」（『琉球大学教育学部紀要』〈第 56 集〉琉球大学教育学部）

- ・「アヘン戦争後の外圧と琉球問題 一道光・咸豊期の琉球所属問題を中心に」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 57 集〉琉球大学教育学部)
- ・「年次解説 昭和二三年一同二四年」(『竹富町史 第十一巻 新聞集成IV』竹富町)
- ・「竹富島歴史物語 一西塘とその時代を中心に」(沖縄竹富郷友会創立 50 周年記念期成会記念誌部会編『創立 50 周年記念誌 竹富』沖縄竹富郷友会)

2001 年

- ・「鴉片戦東亜の外侮和琉球隷属問題一以道光、咸豊時期為中心一」(張啓雄編『琉球認同與歸属論争』中央研究院北亞區域研究)

2002 年

- ・「清末のジャーナリズムと琉球問題(続篇) 一琉球分割交渉の前後一」(『第 7 届 中琉歴史關係國際學術會議論文集』中琉文化經濟協會)
- ・「土通事・謝必振とその後裔たち 一中琉交渉史の一側面一」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 60 集〉琉球大学教育学部)
- ・「郭嵩燾の琉球自立=独立論とその周辺」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 61 集〉琉球大学教育学部)
- ・「15 世紀末の八重山と西塘」(『星砂の島』〈第 6 号〉全国竹富島文化協会)
- ・「記念講演・シンポジウムの開催にあたって」(浦添市立図書館沖縄学研究室編『琉球王国評定所文書刊行事業完了記念シンポジウム報告書 一百田紙に記された琉球の近世一』浦添市教育委員会)
- ・西里喜行・狩俣恵一「「西塘とその時代」論争<上> 一西里・狩俣往復書簡一」(『竹富町史だより』〈第 21 号〉竹富町)
- ・西里喜行・狩俣恵一「「西塘とその時代」論争<下> 一西里・狩俣往復書簡一」(『竹富町史だより』〈第 22 号〉竹富町)

2003 年

- ・「年次解説 昭和三一年」(『竹富町史 第十一巻 新聞集成V』竹富町)
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム(資料編IV)」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 62 集〉琉球大学教育学部)
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム(資料編V)」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 63 集〉琉球大学教育学部)

2004 年

- ・「越南問題と清国ジャーナリズム(資料編VI)」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 64 集〉琉球大学教育学部)
- ・「郭崇燾の琉球自立=独立論とその周辺」(『第 8 回琉中歴史關係國際學術會議論文集』琉球中国關係國際學術會議)

2005 年

- ・「総論「近世琉球」という時代」(公文書館史料編集室編『沖縄県史 各論編 4 近世』沖縄県教育委員会)
- ・「近世末期の内政問題と対外関係」(公文書館史料編集室編『沖縄県史 各論編 4 近世』沖縄県教育委員会)
- ・「越南問題と清国ジャーナリズム(資料編VII)」(『琉球大学教育学部紀要』〈第 67 集〉琉球大学教育学部)

2006 年

- ・「明治初期在日琉球使節の任務と動向I 第 706・707・708 号について」(『2004(平成 16)年度～2007(平成 19)年度 科学研究費補助金(基礎研究(B))研究成果報告書 課題番号 16320091 琉球国王家・尚家文書の総合的研究』)
- ・「『歴代宝案』を読み解く」(『国文学解釈と鑑賞 一特集:琉球文学の内と外一』〈第 71 巻 10

号〉至文堂)

- ・「咸豊・同治期(幕末維新期)の中琉日関係再考 ―尚泰冊封問題とその周辺―」(『東洋史研究』〈第64巻4号〉東洋史研究会)
- ・「咸豊・同治期(幕末維新期)の中琉日関係における銅材「献納」問題」(『琉球大学教育学部紀要』〈第68集〉琉球大学教育学部)
- ・「中琉交渉史における福州琉球館の諸相」(『琉球大学教育学部紀要 ―西里喜行教授退職記念論文集―』〈第68集〉琉球大学教育学部)
- ・「明治三〇年代の八重山島庁と村落」(『竹富町史 第10巻 資料編 近代3 新城村頭の日誌』竹富町役場)

2007年

- ・「近世末期の内政問題と対外関係」(『沖縄県史』〈各論編4 近世〉第6部第1章～6章、沖縄県教育委員会)
- ・「明清交替期の中琉日関係に関する一考察 ―尚賢・尚質・尚貞の冊封問題とその周辺―」(沖縄県文化振興会史料編集室編『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』〈第8回〉沖縄県教育委員会)
- ・「解題 ―(官報)旧慣温存期―」(『竹富町史 第10巻 資料編 近代4』竹富町役場)
- ・「関西沖縄県学生会」(那覇市歴史博物館編『戦後をたどる ―「アメリカ世」から「ヤマトの世」へ―』琉球新報社)
- ・「琉球・沖縄史における『自治問題』」(『環』〈第30号〉藤原書店)
- ・「咸豊・同治期(幕末維新期)の中琉日関係に関する一考察 ―銅材献納(購入)問題をめぐって―」(『第10届中琉歴史関係學術會議論文集』中琉文化経済協会)

2009年

- ・「琉球・沖縄の修史事業と『那覇市史』の位置(意義)」(那覇市市民文化部歴史博物館編『明日

への展望 ―『那覇市史』の成果と課題―』那覇市)

2010年

- ・「東アジア史における琉球処分」(経済史研究編集委員会編『経済史研究』〈第13号〉大阪経済大学日本経済史研究所)
- ・「竹富島の人物 金城亀千代」(『竹富町史だより』〈第31号〉竹富町教育委員会)
- ・「明清交替期の中琉日関係再考 ―琉球国王の冊封問題を中心に―」(『International journal of Okinawan studies』〈第1巻第1号〉琉球大学国際沖縄研究所)

2011年

- ・「日清間の交渉と琉球の選択肢論争」〈第1部第1章〉、「廃琉前後の琉球問題と日清の政策決定過程」〈第1部第2章〉(『沖縄県史』〈各論編5 近代〉沖縄県教育委員会)
- ・「「琉球処分」という負の遺産」(『環 ―特集―「沖縄問題」とは何か 「琉球処分」から基地問題まで―』〈vol.43〉藤原書店)
- ・「第9節 琉球処分前後の竹富島とその周辺」、「第10節 廃琉置県後の島の変遷」(『竹富町史 第2巻 竹富島』竹富町)
- ・「等距離外交の立場維持」(『薩摩侵攻400年 未来への羅針盤』〈新報新書1〉琉球新報社)
- ・「私の自立言論 ―アイロニック・オキナワを超えて―」(『うるまネシア ―特集:琉球民族って何だば〜?―』〈第12号〉21世紀同人会)

2012年

- ・「「琉球処分」論」(『日本の対外関係 7 近代化する日本』吉川弘文館)
- ・「『テンペスト』考 ―小説と史実の間―」(『南島文化』〈第34号〉沖縄国際大学南島文化研究所)

2013 年

- ・「尖閣問題の歴史的前提」（『尖閣諸島と沖縄』沖縄大学地域研究所）
- ・「中琉関係史における尚泰の冊封問題（再論）—琉球側の対応を中心に—」（『南島史学』〈第 79・80 号合併号〉南島史学会）
- ・「政府主催「主権回復の日」式典をめぐる諸問題」（『歴史と実践』〈第 32 号〉沖縄県歴史教育者協議会）

2016 年

- ・西里喜行・漢那敬子「〈史料紹介〉 廃琉置県（琉球処分）関係の新史料紹介 — 俣野意見書・伊藤書翰とその周辺—」（『沖縄史料編集紀要』〈第 39 号〉沖縄県教育委員会）
- ・「琉球処分研究史概要」（琉球大学史学会編『琉大史学 — 第 48 回大会「琉球処分」と沖縄のアイデンティティー特集号—』〈第 18 号〉琉球大学史学会）

2019 年

- ・「琉球 / 沖縄の修史事業、自他認識、自己決定権の位相」（『琉球沖縄歴史』〈No. 1〉琉球沖縄歴史学会）

2022 年

- ・「序文 — 遺稿集発刊に寄せて—」（阿佐伊孫良『阿佐伊孫良遺稿集 竹富島と共に歩む』阿佐伊イチ子）

2023 年

- ・「近世琉球の歴史認識と自他認識 — 「日琉同祖論」を見直す—」（『琉球文学大系 月報 5 — 令和 5 年 9 月琉球文学大系 第 28 巻附録—』ゆまに書房）

2024 年

- ・「首里城正殿の大龍柱論争についての論評と問

題提起 — 『冊封琉球全図』 ルヴェルトガ「写真」とその周辺—」、「歴史学の視点から見た大龍柱の向き」、「琉球王府の主体的外交と龍文様」（編著 / 狩俣恵一・田場裕規『火難の首里城 — 琉球伝統文化の継承—』インパクト出版会）

＊本稿は、漢那敬子氏（沖縄県教育庁文化財課史料編集班）、得能壽美氏、麻生伸一氏（琉球大学人文社会学部教授）の御協力を得て、作成することができました。記して感謝の意を表します。

もろ み ぎ と し ゅ う し
諸見里 秀 思を訪ねて

石 原 絹 子

1 勤王流と秀思

「えっえー！ あなた、あの^{きんのうりゅう}勤王流創設者、
諸見里秀思の子孫なのー」

声をかけてくれた女性は、フリージャーナリストのSさん。彼女が文化協会会長や国立劇場おきなわの企画委員なども担っていることは知っていた。だが、曾祖父が関わった「勤王流」に造詣が深いことに驚いた。私は自分の曾祖父の社会的功績などを考えてみるのがなかったからだ。

諸見里秀思は、母方の曾祖父だ。

彼は幼少の頃、八重山諸島の石垣島から黒島に移住し、そこで流派の始祖・比屋根^{ひやこんひつ}安弼に出会い舞踊の手ほどきを受けた。

安弼は琉球王府筆者として尚泰王に仕えたが、ある罪状で八重山諸島の鳩間島に流刑された。その時、琉球王府宮廷踊りの秘伝書とされる二十二手振型とその心構えなどの記録を持ち込んだ。流刑中に王府が解体され、明治政府による廃藩置県が行われて安弼は放免となった。彼は首里には戻らず、その後、西表島古見村で学問や舞踊を地元の人達に教えた。その噂を聞いた黒島の人達が、村の会所で学問や舞踊を教えるよう彼を黒島に招聘した、というのが通説である。

秀思は、安弼に芸能の資質を認められて、宮廷舞踊の振り付けや心得を伝授された。そして、彼はそれらの伝授を基礎に、民俗舞踊と宮廷舞踊を統合して「黒島口説^{くろしまくどき}」などを振り付け創作した。それらの舞踊には琉球舞踊として受け継がれ、広く知られているものもある。「鳩間節」

もそのひとつである。

私は、小学生の頃から、曾祖父と勤王流の名前だけは聞かされていた。舞踊が好きだったので、母にお願いして近くの琉舞道場に通った。小中学生が気楽に楽しみながら習える教室だった。そこでは、雑踊から古典踊までジャンルを問わず、次々と教えてくれた。

ある日、石垣島に住む親戚の祝いに母が呼ばれた。母は私を連れていき、祝いの席で「鳩間節」を披露させた。衣装を着けて化粧し、通っていた道場から借りたテープの曲に合わせて踊った。すると、招待席から微かな失笑が起こった。

何故だろう。理由がわからないまま踊り終えた。そのことを母や周りの大人達に尋ねることはしなかった。だが、喉に小骨が刺さったような小さな痛みを持ち続けてきた。

一昨年から文献を読むようになって、その理由が分かった。勤王流では宮廷の流れを汲んでゆっくりとゆったりと「鳩間節」を踊る。ところが、私が踊っていたそれは、後に八重山から本島に渡り、テンポが速くなり、合いの手をハッハッと入れる踊りに変容したものだだった。

私は、ジャーナリストSさんから「勤王流の基礎を築いたのは、あなたの曾祖父とっているのよ。子孫として分かったことを記録して」と励まされたことを思い出した。しかし、今や秀思のことを知っている子孫は殆どいない。唯一、秀思の次男の息子から聞き書きをすることができた。

彼は「あくまでも僕の母ちゃんから聞いたことなんだけどねえ」と断りを入れてから、次の

ようなことを話してくれた。

- ・NHK 朝のドラマ「風の御主前」のモデルとなった岩崎卓爾を中心に八重山石垣島気象観測所に有識者が集まるとき、秀思も出入りして外部からの新しい情報を取り入れていた。
- ・統計学や占いに関心をもち勉強していた。竹棒の占いで収入を得ていた。
- ・石垣島のブンニ山のすそ野を開墾した。そこで繊維がとれる植物の畑を作り、踊りの衣装を作ろうとしていた。
- ・ブンニ山の近くには川があり、その山中でマラリアに罹った。戦争中、軍隊の避難命令を受けて住民は市街から山中へ強制的に移され、ハマダラ蚊に刺されてマラリア感染者が爆発的に広がった。遺体処理もできなくなった軍隊は、再び命令を出し、それぞれの自宅に避難するように指図した。
- ・秀思は、字石垣の自宅の座で昭和二十年八月二十日死亡。八月十四日戦争終結が公表され、十五日には天皇からの詔書がラジオから放送されたが、マラリアで高熱を出していた秀思はそれを知らなかったかも知れない。
- ・死が近づいたことを悟った秀思は、高熱でガタガタ震えるなか、黒紋付の着物と袴に着替えた。僕の母ちゃん(秀思の次男の嫁タケ)は、「この人はただ者ではない」と思ったと言っていた。

秀思は戦争によるマラリアの戦死者として二〇〇八年、平和の礎に刻銘された。一九九六年には、「八重山舞踊勤王流記念碑」が、黒島にあった秀思の屋敷跡に建てられた。

謎の多い勤王流といわれているが、諸見里秀思がその基盤をつくったことは事実である。

2 旅のはじまり

「諸見里秀思の勤王流のことが『国立劇場おきなわ』で展示されているわよ。観てね」

芸能ジャーナリストのSさんから電話をいただいた。

翌朝、観にいった。

そこには、これまでに何度か見たことがある曾祖父・秀思の写真があった。勤王流の二十二手振り型を表現しているものだ。

「二十二枚のうち、五枚は第二次世界大戦で焼失し、残った十七枚を石垣市図書館から借りて展示している。今回の展示目的は、当劇場で公演予定の『組踊』の解説であるが、その関連で『諸見里秀思の二十二手振り型』が紹介されている」

若い研究員の女性は、前もって解説をお願いしていた私を案内しながら話してくれた。

「組踊」は、琉球王国時代の役人・玉城朝薫が創始した。沖縄の歴史・民俗を題材にして、能楽、狂言、歌舞伎、京劇などの影響を受けた楽劇が組踊である。それは中国からの冊封使をもてなした芸能のひとつで、踊りの要素が強く「御冠船踊」とも呼ばれる。「組踊」と「勤王流」は、どのようなつながりがあるのだろう。

パンフレットを読んだ。

「八重山舞踊には『祭祀舞踊』と『勤王流を代表とする舞台芸能』がある。勤王流は、始祖比屋根安弼、二代目諸見里秀思、三代目渡慶次長智に伝承され、現在も脈々と受け継がれている。昭和三年に、東京日本青年館で八重山舞踊が公演された。この時、二代目諸見里秀思は舞踊監修のため同行し、小寺融吉はじめ芸能研究者たちに強い印象を与えた。平成十六年に沖縄県指定文化財に登録された」と書いてある。

益々わからなくなった。

「あのう、すみません。私は秀思のひ孫にあたる者なんですが、なぜ勤王流の諸見里秀思が

とりあげられているのですか」

研究員は一瞬、驚いた様子で私を見た。しばらく黙ってから申し訳なさそうに答えた。

「実は、私もよくわからないのです。踊りの研究で博士号をとった友人がいるので、つながります。お名前と電話番号を教えてください」

私は、想定外の出来事にとまどいつつ、電話番号を伝えた。そして、私なりに得られた情報を整理してみた。

始祖・安弼は琉球王府の役人だった。だが、ある罪で八重山鳩間島に流刑された。彼が三十歳の頃と推定されている。その後、琉球処分により王国は解体され、彼は放免となった。四十四歳の頃だ。彼は首里には戻らず、黒島住民の懇願により、黒島に移住して芸能（宮廷舞踊）や学問を教えた。その頃、親の仕事の都合で石垣島から黒島に移住し、村の青年達と祭祀舞踊として「黒島口説」を考案していた十六歳の諸見里秀思は、安弼に芸能の素養をみそめられて宮廷舞踊の基本を伝授された。

この概略はおおかた認められている。しかし、これまで様々なジャンルの専門家が論考を書いているが、未だ判然としないことが多く、「謎の勤王流」といわれる所以だ。

研究員がわかりやすく答えられないのは仕方がない。展示してもらっただけでも有難い。そのように思うようになった頃、ある見知らぬ女性から電話がきた。

「国立劇場展示コーナーにお貸ししていた衣装をとりに入ったら、研究員から、ひ孫にあたるという女性が見に来ていましたよと聞かされて、もうびっくりしてしまって。電話番号を教えてもらってかけています」

よく話を伺うと、彼女は三代目渡慶次長智の弟子、森田吉子師匠の門下生。沖縄県無形文化財保持者に認定されていることを知った。私は、何か応えなければとの思いで、三代目長智のことを語った。

「私が中学生の頃、石垣島から本島へ所用で来た長智が我が家に泊まったことを覚えています。腰の低い、優しい、小柄なおじいさんでした」

「そうですか！ 私の師匠森田先生は、その優しい長智師匠から、厳しく指導されたそうです。ある時、森田先生は長智師匠から、『むぬんしるは、あわれなむんゆのう』（ものの本質をみてしまうと、難儀でも逃げられなくなる）と言われ、そのことを肝に銘じて踊り続けたと教えてくれました」

電話の向こうから弾む声で返してくれた。

私は、このことばを聞いて、ジャーナリストSさんに言われたことを思い出した。

「あなたが考えている以上に、芸能の道を極めようとしている人達にとっては、自分の源流がどうなっているかを想うものよ。源流をつくった人の子孫が現にいとわかることは、すごく励みになると思うわ」

それなりに理由があったにせよ、なぜ子孫たちは、口伝えや聞き書きを残してこなかったのだろうか。気づくことが遅すぎる。私は自分のことを恥ずかしく思った。そのとき「秀思と勤王流のことを詳しく調べて記録に残そう」と決意した。

秀思になりきって、書いてみたい。

3 黒島の風に吹かれて

「今、ホテルのロビーで待っているのですが。確か、二時の約束では…」

大田静男氏から電話が入った。

「しまった！」

私は泡を食った。大田氏は『八重山の芸能』『八重山戦後史』『八重山の戦争』などを記された郷土史家である。

「今、執筆中で忙しいですから…」と一度は断られたのに、どうしてもお願いして時間を

つくってもらったのだ。その大事な約束を私は忘れてしまっていた。

その日、二十年ぶりの石垣島で、空港に迎えにきてくれたのは、親戚の秀清さん。曾祖父秀思の弟の孫だ。今回が初対面。那覇空港を出発前に電話を入れると、「黄色の帽子をかぶっています」と、目印を教えてくれた。石垣空港に着くと、すぐに秀清さんを見つけた。到着が三十分も遅れたのに、彼は落ち着いた口調で、自分は昭和二十二年生だと自己紹介しながら、車に案内してくれた。

「脑梗塞で倒れましてね。幸い回復したんですが、吃音になってしまって、しゃべることが不自由になっています」

行動は機敏だが、言葉は控えめだ。それがかえって誠実に映る。

ヤラブの街路のトンネルを走り抜けたところで、レストランの駐車場に車を停めた。彼の甥が経営している店だという。赤瓦の屋根で、コテージ風の真新しくおしゃれな店だ。

「うわあー！おしゃれですねえー」

感嘆する私達夫婦を、秀清さんはうれしそうな表情で玄関まで案内してくれた。大きなガラリ戸を開けると、窓の向こうに青い空と紺碧の海が広がっている。絶景だ。

店内に入ると、一番手前の客席に三人の女性がにこにこ笑って座っていた。秀清さんのおばさんと二人の妹だと紹介された。その手元には、事前に私が郵送した手紙のコピーが置かれていた。

私達を歓迎するための食事会を用意してくれていたのだ。

初めての対面にもかかわらず、話はすぐに盛り上がった。「秀思の調査や聞き書き」に、期待を寄せているようだ。彼らの温かいもてなしに嬉しさがこみ上げて、私は舞い上がってしまった。それで、大事な約束が吹き飛んでしまったのだ。

大田氏からの電話で我に返り、慌てふためく私に、秀清さんは落ちついて言った。

「大丈夫です。大田は私の一期後輩ですから」

一時間も遅れてホテルのロビーに駆け込んだ。姿が見えない。やはり、帰られたのだと思い、ガックリきた。旅の目的の半分が失われたような気持ちになった。念のため、何か伝言がないかとホテルの受付に尋ねた。

「三十分ほどお待ちになっていましたが、用事を済ませて戻ってくると、お出掛けになられましたよ」と、受付係が教えてくれた。

ほっとした。

すぐに、大田氏が戻ってこられた。恰幅が良く、袖をめくり上げたシャツにジーンズのスタイル。初対面だけに緊張した。

夫を紹介する。七十九歳の夫、七十六歳の私と秀清さん、七十五歳の大田氏。そんな年齢を忘れるほどの高揚感を漂わせて、私達はテーブルを囲んだ。話は次第に熱を帯びていった。

私は、俄かに仕込んだ「曾祖父秀思と勤王流」についての諸論考と、それらのひとつである大田氏の論考とを比較させながら、あれこれと聞いた。詳細はどんどん忘れていったが、夫が録音をとっていてくれた。

謎が多い始祖安弼のことを、改めて尋ねた。大田氏は、「上からみても、下からみても、右からみても、左からみても、もうこれ以上は謎は解けませんよ」と言われた。

秀思が振付創作した舞踊「黒島口説」について尋ねると、

「あれは傑作です。前半は七・五調の和歌形式。球舞舞踊古典踊りの手で黒島の情景を表している。ところが、後半になると、伴奏はなく、ガラリと変調して囃子^{はやし}だけです。島の生活を讃え、五穀豊穡を願う歌で、民族風な自由な踊り。明治初めの頃にこのようなスタイルを創るのは、革命的ですよ」

そして、「子孫であるあなたが秀思について

書くなら、秀思になりきって書くといいですよ」
とおっしゃった。

「ええ、明日、『黒島口説』ゆかりの地、黒島を
訪ねる予定です」

「ああ、いいですねえ。黒島の風に吹かれると
いいですよ」

大田氏は初めて顔をゆるめながら私を励まし
てくれた。

外はもう夕暮れだった。秀清さんと大田氏を
見送ったあと、二十年ぶりの石垣島の繁華街を
夫婦でぶらぶらと歩いた。だいぶ変わってし
まっていた。

夫は疲れたのだろう、ホテルの部屋に戻ると、
入浴を終えてすぐに眠ってしまった。

私は、今日一日の出来事が頭をかけ巡り、な
かなか寝付けなかった。

明日は、どんな黒島の風が吹くのだろう。

4 ゆかりの地・黒島

黒島行きフェリーの舳先が、穏やかな内海を
かき分けて南に進む。時折、波が当たり、その
音が、秀思の声のように聞こえた。

二十年ぶりの黒島だ。石垣島に住む親戚が
「黒島の元郵便局長を訪ねれば、島の様子が分
かるかもしれない」と教えてくれた。

港に着くと、親戚が頼んでくれていた島の案



八重山舞踊勤王流ゆかりの地碑（黒島伝統芸能館）

内人が、作業用軽トラックの荷台に夫と私を乗
せてくれた。軽トラックは、島の中央にある東^{あがり}
筋集落^{すじ}を目指してグングン走った。牧草と牛舎
と小さな森を通り過ぎ、十分ほどで目的の家に
着いた。

珊瑚礁の石垣で囲まれた赤瓦の家、その門の
両側には琉球松が植えられている。庭から声を
かけるが返事がない。島の案内人が「あれ一、
留守かなー」と呟きながら、台所の横扉を引く
と、初老の女性がこちらを向いて座っていた。
脚の具合が悪そうだ。髪を頭頂で結わえ、落ち
着いた品のある表情で、「夫は今、お昼寝に入っ
たところです」と口を開いた。お入りなさいと
は言わない。

私は一瞬戸惑ったが、意を決してお願いした。
「諸見里秀思のことを伺いたくて尋ねてきまし
た。入ってもよろしいでしょうか」

その女性は元黒島郵便局長の妻、恵美さんで、
御嶽の神司をされている方だ。彼女からお話を
伺うことができた。

話は、彼女が御嶽の神司になるまでの体験か
ら始まった。

「神司は、なりたくてなれるものではない。私は、
ずいぶん抵抗したけどね。たくさんの試練を受
けました。神司は、つかざるを得なくなるので
すよ。御嶽での祈りだけでなく、祭祀の奉納舞
踊も引き継いできました。玉代勢泰興^{たまよ せ やすおき}先生が、
黒島民俗芸能保存会をつくられ、伝承に骨折っ
てくれました。

泰興先生は、去年の末頃、亡くなる前に、奉
納舞踊のお振り手のことで何度も私に確認の電
話をかけてきていましたよ」

彼女はそう言いながら、生前に泰興氏が調査
記録した資料をとり出して見せてくれた。

それは「黒島民俗芸能・御振りの舞伝承者系
譜」「黒島民俗芸能舞踊論・勤王流の源流 御
振りの舞～諸見里秀思風～」 「黒島口説考」と
題する研究資料の三編だった。

泰興氏は高校教師の傍ら、黒島民俗芸能を熱心に調査研究してこられた。私は泰興氏が黒島出身だと聞いていたので、是非お会いして教えを乞いたいと思っていた矢先だった。持病が急に悪化して亡くなられた。連絡が遅かった。惜しい人を亡くしたと悔やんでいただけに、黒島で彼の著された資料を通してお会いできたことを感謝した。「継承者も私一人になってしまい、どうしたものかねえ」

恵美さんは自分に言い聞かせるように呟いた。私は、これらの資料を、その道の専門家につないでいこうと思った。「奉納舞踊の中で、特に広く知られるようになった踊りが『黒島口説』です。今では琉球舞踊のひとつになっているけど、元々は奉納踊りとして明治二十七年に、村の青年、諸見里秀思と玉代勢秀喜が村の総代に懇願されて創ったと聞いています。

私は先輩たちから、秀思から引き継いだ手振り型や心得を継いでいくことが大切だと教えられてきました。そのためには、歌の内容や意味をよく理解して踊らないと」

脚の具合が悪い恵美さんは、座ったまま、「黒島口説」を歌い踊ってくれた。そして、特にユーモラスで人気がある五番を解説してくれた。

これまで意味がわからず、まるで外国語のように聞いていた「黒島口説」だったが、いつの間にか、恵美さんと同じ口調で息もぴったりと手振りしながら踊っている自分に驚いた。

イーヤ イーヤ

くるしまどうんた ゆび はまう
黒島娘達が 夕ぬ浜下りさみゑ

はまがんと
浜蟹捕らんでい

あし たかあし ゆくあしちか
足や高足 横足使とてい

ありあり あだん みー
阿檀の中から

うふちみ う ふ ふ
大爪 打ち振り振り

あっがきつつあ あぶ
母へいへい

なま はやし
今ぬ囃にうぐゆなはぶら サーサッ

一気に、時空を超えて明治初めの頃、十六歳で「黒島口説」を振り付け創作した秀思と一緒に踊っているような不思議な感覚だった。

この踊りは、黒島の東筋集落から他の集落へ、後に島外でも演じられ、八重山各地域に広がった。そして昭和三年には、東京青年館主催の第三回全国民謡舞踊大会で発表された。すると満場の観客から拍手や指笛やアンコールが出るほどに、高く評価された。

その大会に舞踊団代表として同行した八重山研究の第一人者・喜舎場永珣氏は「八重山芸能と勤王流」と題する論考でそのように記している。

秀思はその時に舞台監督として参加した。五十二歳であった。私の曾祖父である。

鳩間公民館の起案資料（一部）

竹富町史編集委員会委員

大 城 肇

〔はじめに〕

1984（昭和 59）年に第 14 代鳩間公民館長を務めた大城 博の時に、竹富町の関係部署へ提出した要請文や陳情書、申請書、そして陳情に対する回答等をここに公開し、ある一時点における鳩間公民館の活動を垣間見る資料としたい。これらの資料は、町史編集室に保管してもらっていたものである。

日本復帰後、鳩間島は過疎化によって人口が激減したために、費用対効果の観点から社会共通基盤の整備（公共事業）等が実施されることは多くなかった。それゆえ、住民の心の中では今も諦めの念が強く残っているので、以下の資料を開示し、今後の島興しのための参考に供したい。

当該書類は、島の歴史のごく一断面に過ぎないが、地域政策の形成過程の一端をうかがい知る資料となりえるので、簡潔な解題を付すことにした。

番 号	表 題	備 考
No.19820524	町道（中森線・大泊線）整備延長に関する陳情書	B5 用紙 1 枚、2 部。鳩間公民館長・大城博と鳩間地区区長・鳩間正一両氏連名。
No.19820000	天然記念物現状変更許可申請書	B5 用紙 2 枚、鳩間公民館長・大城博→竹富町教育委員会
No.19830425	春の遠足実施計画	鳩間小学校、B4 用紙 1 枚
No.19830928	陳情の審議結果について（通知）	B5 用紙 1 枚、竹富町議会議長・玉代勢泰徳→鳩間公民館長・大城博
No.19831125	発電機の払い下げについて（要請）	B5 罫線入り用紙 3 枚、2 部。鳩間公民館長→竹富町長・友利哲雄
No.19850213	辞令書	B5 用紙 1 枚、大城博氏の竹富町消防団退職に伴う「辞令書」。竹富町消防団団長・山城木→大城博

鳩公 7 号

昭和 57 年 5 月 24 日

鳩間公民館長 大城博 印

鳩間地区区長 鳩間昭一 印

町道（中森線・大泊線）整備延長に関する陳情書

鳩間埠頭より中森に至る町道中森線は島の名所・鳩間中森へ通づる主要道路であるばかりでなく農業・畜産を進めている島民からすれば産業道路に等しく、また棧橋から学校へ至る大泊線は郵便局、公民館、学校等の公共施設へ通づる道路として鳩間島にとっては最も重要な幹線道路であります。

それにもかかわらず町道とは名ばかりで開設以来何等の補改修も行われず積年の風雨に晒されて荒廃甚しいものがあります。

殊に中森線は中森の稜線に沿って頂上に至る傾斜道路であるため台風や豪雨の被害を受け易く従来より荒廃甚しかったのでありますがこれに追打ちをかける様に海底水道開設の折にはこの道路を掘鑿して水道本管を埋設したため道路表面の土砂が押し流され、岩盤が露出して岩礫と化し一部では歩行にも支障をきたす様な惨状を呈し特に夜間等は危険であり高齢者が多い鳩間島にとっては無論のこと自転車乗りなどいつどの様な事故がおこるのか心配でなりません。

何卒、町当局の御理解の下に至急実情調査の上町道延長と整備を実施下さる様実情を具申して陳情申し上げます。

記

中森線 巾 4m 長さ 149m 延長部分 巾 4m 長さ 89m

大泊線 巾 4m 長さ 239m 延長部分 巾 4m 長さ 92m

〔**解題**〕 この陳情書は、棧橋から中森へ通じる縦（南北）の町道約 150 mと棧橋から学校へ通じる横（東西）の町道約 240 mについて、舗装整備してもらふ旨の陳情書である。同陳情の甲斐あって両道路の舗装整備が行われ、今日に至っている。文中に海底水道開設（1980〈昭和 55〉年 7 月 30 日）に伴う水道本管の埋設について言及があるが、これは貯水タンクを中森の頂上付近に設置し、そこで水質を調整して各戸へ給配水するシステムの本管部分である。なお、中森線の西側路肩は降雨時には土砂が流れ出し、インヌカー（西の井戸）を埋めつつある。

昭和 57 年 月 日

竹富町教育委員会 殿

竹富町字鳩間 49 番地

鳩間公民館長

大城博

天然記念物現状変更許可申請書

下記のとおり竹富町指定天然記念物の現状変更をしたいので、御許可下さるよう申請いたします。

記

- 1 名 称 竹富町指定天然記念物・鳩間中森
- 2 指定年月日 昭和 47 年 8 月 30 日
- 3 所在の場所 竹富町字鳩間
- 4 関係土地所有者 西原章吉
- 5 現状変更を必要とする理由

鳩間中森の環境整備を一層促進するため。鳩間中森は鳩間島のシンボルであるとともに本町を代表する民謡「鳩間中森」の舞台でもあります。この鳩間中森を名実ともに全国に誇れる景勝地として整備することは、貴重な財産を子孫代々まで継承することができるのみならず、島の産業振興にも大きく貢献できるものと思料されます。

6 現状変更の内容及び実施方法

鳩間中森に物見台を建設し、同地域の一層の環境整備を図ります。この事業は、郷友会を中心に寄附を募り、その事業費の範囲内で有志によって行う予定です。

7 現状変更により生じる物件の滅失、き損、景観の変化その他の影響等に関する事項

現状変更に当って、事前に県の専門員の指導を受けることにしていることから物件の滅失、き損については心配なく、逆に、景観の向上に寄与できるものと思料します。

8 施行着手予定年月日及び終了予定年月日

自 昭和 年 月 日

至 昭和 年 月 日

9 施行予定者の氏名及び住所

鳩間中森物見台建設期成会会長 通事力

竹富町字鳩間

10 その他参考となる事項

本事業を施行するに当り、沖縄県教育庁文科課専門員・日越国昭、同・大城学両氏の指導を受ける予定です。

〔**解題**〕 この申請書は、竹富町指定天然記念物・鳩間中森の環境整備を行い、石積みの物見台（遠見台）を復元するための現状変更許可を申請したものである。歴史的遺構である遠見台は、郷友会等の芳志により 1983（昭和 58）年に中森の一面に復元された。ついでながら、中森（東の杜）の遠見台とペアとなるブシンヤー（武士の家）は 2010（平成 22）年に一部復元され、17～18 世紀の烽火制度の一端を偲ぶことができる。

No.19830425

春の遠足実施計画（昭 58.4.25）

鳩間小学校

期 日 4 月 29 日（金）

天気予報 晴れ時々くもり

行先地 立原の浜

ねらい 美しい自然に親しませると共に体力、気力の充実を図る。
鳩間島の事物（象）にふれ経験を豊かにし郷土学習を充実発展させる。
規律ある集団行動を通して望ましい社会態度をやしなう。
校外における見学、レクリエーション活動を通して協調性、創造性を高めると共に相互の人間関係を深める。

日	程	8:30	職員話し合い 準備
		9:00	学級話し合い 忘れ物点検 準備
		9:30	全員集合（運動場） 校長あいさつ 諸注意 こいのぼり掲揚
		9:50	出発 アンヌカー インヌカー 友利御嶽 中森 ニシドウ ウイヌカー パチンガカー アラカワ
		11:00	立原の浜着 テント、マキ、カマ準備
		12:00 ～ 1:00	食事
		1:00	サカナ捕獲 料理
		3:30	レクレーション
		4:30	片づけ 帰校
		5:00	解散

持ち物 弁当、水筒、潮干がり用具、その他

各担当責任者

音楽担当	—()	アコーディオン、カセット
医療担当	—()	虫さされ
漁労担当	—()	あみ入れ
テント、カマド、マキ	—()	
料理道具担当	—()	
誘導説明担当	—()	

レク担当 一()
運搬担当 一()

準備する物

備 考

〔**解題**〕 この文書は、1983(昭和58)年4月25日に作成された鳩間小学校の春の遠足の実施計画書(案)である。児童数8名の春の遠足は、週末の4月29日(金)に終日かけて行われた。小学校を出発し、目的地・タチバルハマ(立原浜)までの道中で井戸や御嶽、中森などの名勝・旧跡をめぐり、魚の捕獲やレクリエーション等を通じて、「ねらい」に示された自然に親しみながら社会態度や人間関係が得られるよう企画された。小規模ながらも島でしか体験できない貴重な遠足であった。

No.19830928

竹議第156号
昭和58年9月28日

鳩間公民館長
大城 博 殿

竹富町議会議長 玉代勢 泰徳 印

陳情の審議結果について(通知)

昭和58年9月16日付をもつて提出された、次の陳情は本町9月定例議会において採択と決定したので通知します。

記

- 1、件名 陳情第6号鳩間中学校設置について

〔解題〕 この通知文書は、竹富町議会議長から鳩間公民館長あての公文書である。1983（昭和 58）年 9 月 16 日付で発出した鳩間中学校設置の陳情文に対する回答である。ただし、陳情文の原本は確認できない。鳩間中学校は、1949（同 24）年 3 月 31 日に設置認可され、鳩間小学校に併置された。過疎化が進み在籍生徒数がゼロとなったため、1974（同 49）年度から入学生・在校生が出るまで廃校措置がとられ、25 年の歴史を閉じた。廃校から 10 年後、町議会において審議・採択された鳩間公民館からの陳情が実を結び、1984（同 59）年度から鳩間中学校は 10 年ぶりに設置・復活して現在に至っている。

No.19831125

昭和 58 年 11 月 25 日

竹富町長

友利哲雄 殿

鳩間公民館長

大城博 印

発電機の払い下げについて（要請）

貴職におかれましては、益々、ご清栄の段お慶び申し上げます。平素から鳩間島の振興発展に関して特段のご理解とご援助を賜わり、衷心より厚く感謝申し上げます。

さて、鳩間島では、島の産業振興を図り、過疎化の進行に歯止めをかけ、地域活動の灯を絶やすことのないよう、住民が一致団結して日夜奮闘しているところでございます。

住民の永年の縮願でありました水道と電気は、貴職のご厚情とご尽力により完備することができ、ここに深甚なる敬意を表する次第でございます。とりわけ、24 時間点灯は、この島における本年最大のトピックスでありました。

また、一方では、水と電気の恩恵が十分に受けられるようになった現在、産業振興の方向にも明るい兆しがみえてきました。着々と島おこしの進む中で、基幹産業の一つである水産業においては漁船の大型化、近代化が、また観光の分野においては観光船やグラスボートの導入等が進展するものと予想されます。

そのような動向の中で、産業振興の基礎的条件として、まだまだ整備・拡充を要する分野も残されています。船揚場がその一つであり、早急な拡充がまたれています。とりあえず、小型の老朽化した陸揚用巻上げ機の取り替えは、緊要の課題となっております。船隻数の増加、船舶の大型化、従事者の高年化等を勘案しますと、より馬力の大きな新型機を設置することによって省力化と安全性を確保できるものと確信いたします。

つきましては、海底送電によって遊休化している発電機を陸揚用巻上げ機の代替のために、払い下げていただきますよう、特段のご高配をお願いいたします。

陸揚用巻上げ機の新旧代替が産業振興にもたらす効果の重要性をご覧察いただき、住民それぞれの宿願をかなえていただきますよう、ここに要請申し上げます。

〔**解題**〕 この要請文は、海底送電の実現によって不要となった発電機を、船揚場の陸揚用巻上げ機として転用させてもらいたい、という趣旨のものである。ランプ生活が続いていた鳩間島に共同自家発電事業が導入されたのが1969（昭和44）年である。10年後の1979（同54）年に発電機が増設され、供給時間も当初の4時間から19時間に延長した。1983（同58）年7月1日に海底送電施設が竣工し、自家発電機は海底送電にその役割を譲った。この要請によって発電機の払い下げ・転用が実現し、漁業をはじめとした島の産業振興・地域活動に寄与した。

No.19850213

辞令書

氏名 大城博（大15年4月15日生）

退職を承認する

備考 入団 昭和51年1月6日

昭和60年2月13日

竹富町消防団

団長 山城 木 印

〔**解題**〕 大城 博は、1984（昭和59）年に第14代鳩間公民館長を務めた。公民館長の任期が終わった翌年に、9年間務めた消防団を退団している。そのときの退職辞令である。

「白浜歴史年表」の作成について

大 城 一 文

白浜公民館は2021年（令和3）、西表島白浜地域の歩みを記録すべく、「令和2年度（補正予算）国立・国定公園への誘客の推進事業費及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費補助金」の助成を受け、井上デザイン設計の制作により、『我が白浜』を刊行することができた。

『我が白浜』の内容は、大きく「白浜のあしあと」「未来へ残す記憶の記録」「あの日・あの時 あの瞬間」「我ら白浜現住民」の四つの部門から構成されたもので、白浜の過去・現在・未来を総覧しようとするものである。そして、白浜地域のひとりひとりの顔が見えるように、なるべく証言者を明記し、後世においても検証できるような記述に努めている。

このうち「白浜のあしあと」の18頁から21頁には、「歴史年表」が収録されている。本稿は、この「歴史年表」をベースに、さらなる白浜地域の精密な年表を作成するため、年表には採用されていない『我が白浜』の本文記事と、新聞資料を加えた年表を基礎的な資料として提示・提案するものである。また、これは白浜の未来に向けた備忘録的な役割を果たす意味合いも見いだせるものと思われる。

さて、「歴史年表」の記事には★印を冠し、また本文の年代（日時）が明記されている記事には●印を冠して表わし、（ ）にはその頁数を示すことにした。また、写真もキャプションに撮影年が明記されているものについては、重要な歴史資料として、キャプションの表記を引用して年表に取り入れて作成した。

新聞記事は、『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成』〈Ⅰ〉～〈Ⅷ〉に収録されている新聞記事（明治期から1966年〈昭和41〉）のうち、タイトルに「白浜」を含むものを立項したが、それらには◆印を冠して表わした。『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成』のなかには、大見出し（タイトル）に「白浜」が表われないが、西表島に関する記事や炭坑に関する記事など、「白浜」に触れられている記事も数多くみられるが、ここでは割愛することにした。また、1967年（昭和42）以降の記事は、手元にある資料から加えて記載することにした。

新聞記事について、いずれは地域の内側からの視点で検証する必要も考えなければならないだろう。そして将来、より充実した精度の高い、我が白浜の歴史年表を提示したいものである。

西暦（和暦）	記 事（★は「歴史年表」、●は本文、◆は新聞記事見出し）
1885 （明治18）	★「当時は白浜ではなく浜崎（パマザシ）と読んでいた」。 ●「三井物産鉱業により炭鉱業が開始」（22頁）。
1895 （明治28）	●「大倉組により石炭の採掘事業が移り、海底有線電話事業を成し本土との通信業務を成功させた。のちに政府に移管され、西表電話郵便局のはじまりである」（22頁）。
1912 （大正元）	★「浜崎から白浜へ呼び名変わる」。

1914 (大正 3)	★「白浜ではカツオ漁が盛んだった」。
1915 (大正 4)	●「自由移民と鉱山開発によってできた」(12 頁)。
1917 (大正 6)	★「沖縄炭鉱開坑」。
1918 (大正 7)	★「星岡鉱業開坑」。
1919 (大正 8)	★「琉球炭鉱が白浜の埋め立てを進める」。 ●「大正 8 年には南海炭鉱が開鉱し白浜に本部事務所をおいていた。白浜の大半はこのころに埋め立てられ、台湾人も多く入り賑やかであった。当時は週 2 回の商船の出入りがあり、長崎税関所が設置されるほど白浜は賑わっていた。巡査駐在所も設置され保安業務にあたっていた。」(●)
1925 (大正 14)	★「内離島成屋に会計学校創立」。
1926 (大正 15)	●「農務省に勤務していた渋谷敬三(祖父、渋谷栄一)も 1926 年に台湾視察の帰りに西表島の炭鉱を視察している」(22 頁)。
1930 (昭和 5)	★「炭坑の子供たち西表尋常小学校へ通学始める」。
1933 (昭和 8)	◆「西表島白浜部落に独立した字を建設したいと居住者の叫び」『八重山民報』1933 年 1 月 21 日付。
1934 (昭和 9)	★「東海三河セメント工業西表炭鉱、南海炭鉱開坑 白浜にコンクリート 3 階建て事務所建設」。
1936 (昭和 11)	◆「西表島の白浜に理想郷の文化部落建設へ」『先島朝日新聞』1936 年 10 月 27 日付。
1937 (昭和 12)	●公民館長「昭和 12-13 年度 川島久吉」(82 頁)。 ◆「西表郵便局、白浜移転」『先島朝日新聞』1937 年 2 月 9 日付。 ◆「西表白浜に私立小学校」『先島朝日新聞』1937 年 2 月 21 日付。 ◆「南海炭坑創立と白浜小学校校舎」『先島朝日新聞』1937 年 2 月 24 日付。 ◆「西表祖納と白浜間の道路」『先島朝日新聞』1937 年 2 月 24 日付。 ◆「南海炭坑白浜校誕生」『海南時報』1937 年 4 月 5 日付。 ★「白浜神社建立 丸三、星岡、南海炭鉱が部落会を誕生し白浜部落となり、その祝いに海神祭が行われた」。 ●「昭和 12 年工業地から白浜部落と名付けられ、その祝いとして旧暦 5 月 4 日に海神祭波龍船を漕ぎ祭りをしたのが始まり / ☆証言者(大城文子)」(28 頁)。 ★「私立白浜尋常小学校創設」。 ◆「西表島の開拓は交通網の完成に 白浜祖納線完通近し」『海南時報』1938 年 8 月 23 日付。
1939 (昭和 14)	●公民館長「昭和 14-16 年度 宮里正教」(82 頁)。 ★「西表郵便局が内離より白浜へ移転」。 ◆「西表白浜仮教場 愈々本年度から実現」『海南時報』1939 年 4 月 14 日付。
1940 (昭和 15)	★「西表尋常小学校白浜仮教場ができる」。 ◆「炭鉱地区に神社 西表島に建立計画一坑夫慰安の娯楽場も一」『先島朝日新聞』1940 年 4 月 3 日付。 ◆「流行性脳脊髄膜炎 西表白浜に敵前上陸」『先島朝日新聞』1940 年 5 月 18 日付。

1941 (昭和16)	◆「白浜支会愛国貯金」『海南時報』1941年1月26日付。 ★「西表国民学校白浜分教場になる」。 ●「昭和16年に船浮要塞が設置されると、白浜もその一部に組み込まれ、陣地構築には住民ほか炭鉱夫も駆り出され、戦時色が濃くなってきた」(12頁)。
1942 (昭和17)	●公民館長「昭和17-19年度 岩見直喜」(82頁)。 ●「石炭採掘事業は昭和17年(1942)まで行われたが、軍事作戦により鉱山従業員を徴用に築城部隊に編入させ、賑わった鉱山の閉山もやむなきに至った。」 ◆「白浜憲兵分駐所防牒に拍車」『海南時報』1942年12月23日付。
1945 (昭和20)	●公民館長「昭和20-21年度 長谷川広之」(82頁)。 ★4/3「米軍の爆撃を受け白浜部落全滅」。 ★8/15「終戦」。 ★「戦災住宅復興のため材木切り出し始める」。 ★「海神祭復活」。
1946 (昭和21)	★7/1「西表初等学校白浜分教場に改称」。
1947 (昭和22)	●公民館長「昭和22-23年度 仲原貞清」(82頁)。 ★7/1「西表初等学校白浜分教と改称する」。 ●「学校教育は炭鉱関係者が昭和22年に私立白浜尋常小学校を創立したことに始まる」(12頁)。 ◆「白浜 - 祖納電話開通」『八重山タイムス』1947年11月28日付。
1948 (昭和23)	★「西表郵便局祖納へ移転」。 ★「白浜部落に電話が設置される」。 ●「一九四八年の春、工務部西表開発出張所の創立二周年記念式典が行われたが、白浜は炭鉱によってできた集落で元坑夫やその家族も多く、その配慮から、記念式典を山神祭りと呼び、白浜集落の人を交えて盛大に行われた」(32頁)。→名嘉地義昭「西表島」。
1949 (昭和24)	●公民館長「昭和24年度 吉村玄徳」(82頁)。 ★「西表白浜分校となる」。 ◆「西表白浜に近く小学校誕生」『南琉日日新聞』1949年5月9日付。
1950 (昭和25)	●公民館長「昭和25年度 松川寛徳」(82頁)。
1951 (昭和26)	●公民館長「昭和26年度 安次嶺亀助」(82頁)。
1952 (昭和27)	●公民館長「昭和27年度 上江洲由豊」(82頁)。
1953 (昭和28)	●公民館長「昭和28年度 西表豊文」(82頁)。 ●「鹿児島県に拠点を置く岩崎産業と沖縄の國場組が資本金5千万円を共同出資し、パルプ用木材の伐出を目的とした八重山開発株式会社(岩崎与八郎社長)を設立。50年間に及ぶ部分林契約を琉球政府と結び、西表島の国有林の約3分の2に相当する伐採と植樹を行うことになった」(23頁)。 ◆「白浜を唯一の漁港に」『八重山毎日新聞』1953年12月1日付。
1954 (昭和29)	●公民館長「昭和29年度 島本太郎」(82頁)。
1955 (昭和30)	●公民館長「昭和30年度 西里新津」(82頁)。 ★9/3「グレイス台風により白浜全滅 米軍テントで生活」。 ◆「白浜、舟浮を漁港に」『八重山毎日新聞』1955年4月24日付。

1956 (昭和 31)	●公民館長「昭和 31 年度 平良進」(82 頁)。 ◆「白浜校の独立を認可申請」『海南時報』1956 年 1 月 25 日付。 ●2/23「竹富町立白浜小学校、中学校として独立する」。 ◆「白浜・嵩田両分校独立認可」『八重山タイムス』1956 年 3 月 6 日付。 ●4/1「竹富町立白浜小中学校に改称」。 ◆「白浜小中校 盛大な開校式典」『八重山毎日新聞』1956 年 4 月 10 日付。 ◆「白浜を基地として沖水社が巾着網の操業試験計画」『海南時報』1956 年 6 月 27 日付。 ●「製材所を設置する白浜と稲葉を結ぶケーブルが完成」(23 頁)。 →「一向に操業を開始できずにいた。理由として木材価格の下落により採算がとれないため操業を見合わせていると説明、また朝鮮戦争に伴う枕木の需要を当てにしていたが、休戦状態になって見当が外れたとも言われた」(23 頁)。 ◆「白浜にサバの大群」『海南時報』1956 年 10 月 3 日付。
1957 (昭和 32)	●公民館長「昭和 32 年度 村山友孝」(82 頁)。 ◆「白浜を漁業基地に」『八重山毎日新聞』1957 年 1 月 17 日付。 ◆「白浜港の伸長を」『八重山新報』1957 年 1 月 31 日付。 ◆「白浜の石炭開発等 星議員、竹富町長ら陳情」『八重山新報』1957 年 2 月 3 日付。 ◆「白浜基地構想 業界筋で検討」『八重山タイムス』1957 年 6 月 6 日付。 ◆「白浜を貿易港に」『八重山毎日新聞』1957 年 6 月 8 日付。 ◆「白浜を漁業中心地に 冷凍船で鮮魚輸送」『八重山新報』1957 年 9 月 22 日付。
1958 (昭和 33)	●公民館長「昭和 33 年度 大城安市」(82 頁)。 ◆「白浜、船浮両港に航路ブイ設置」『八重山毎日新聞』1958 年 6 月 24 日付。 ◆「白浜漁業基地化の日近し」『八重山タイムス』1958 年 7 月 16 日付。 ◆「白浜の漁業基地化」『八重山タイムス』1958 年 9 月 2 日付。 ◆「白浜台風被害甚大」『八重山毎日新聞』1958 年 9 月 6 日付。 ★9/16「B 円から米ドルへ切り替わる」。 ◆「教育長事務所 古教科書贈る 白浜被災地へ」『八重山毎日新聞』1958 年 9 月 17 日付。 ◆「白浜中学校 野菜作り大童」『八重山毎日新聞』1958 年 9 月 19 日付。 ◆「動き出す白浜漁業基地」『八重山タイムス』1958 年 9 月 20 日付。 ◆「白浜の台風被害」『八重山タイムス』1958 年 10 月 3 日付。 ◆「白浜救済に竹青連起つ」『海南時報』1958 年 10 月 23 日付。 ◆「白浜救済陳情終え 前大団長語る」『海南時報』1958 年 10 月 27 日付。 ◆「まだ届かぬ白浜援助金」『海南時報』1958 年 10 月 31 日付。 ◆「白浜救済義援金や見舞い品どっさり」『海南時報』1958 年 11 月 7 日付。 ◆「白浜校へ卓球用具一式」『海南時報』1958 年 11 月 7 日付。 ◆「白浜台風義損金」『八重山タイムス』1958 年 11 月 7 日付。 ◆「復旧に大量 白浜部落の近況」『八重山タイムス』1958 年 11 月 8 日付。
1959 (昭和 34)	●公民館長「昭和 34-37 年度 藤村政次」(82 頁)。 ◆「白浜突堤復旧何時の事」『八重山タイムス』1959 年 4 月 4 日付。 ◆「白浜栈橋増築が急務」『八重山毎日新聞』1959 年 5 月 2 日付。 ◆「白浜の早急築港を」『八重山毎日新聞』1959 年 5 月 12 日付。
1960 (昭和 35)	★「白浜発電組合設立し、部落内の発電が行われた」(年表)。 ●「岩崎産業は十条製紙に事業権利を譲ることになった。/1960 年からようやく事業が再開され翌年まで本格的に木材の伐採が始まった。岩崎産業時代は白浜に製材所、パルプ工場を作る計画だったが、十条製紙は熊本にパルプ工場があったため、白浜から木材を熊本県三隅港まで運ばれていた。十条製紙による伐採はその後約 10 年間順調に操業を続けた」(23 頁)。 ●「十条製紙ができたのは 1960 年、昭和 35 年」(34 頁)。 ●加勢本曙「しらはま荘は 1960 年頃から母がメインでやっていた」(37 頁)。

1962 (昭和 37)	◆「林業の町白浜 材木ブームで沸く」『八重山毎日新聞』1962 年 2 月 22 日付。 ◆「白浜にパイン工場」『八重山毎日新聞』1962 年 2 月 23 日付。 ◆「白浜港も調査する」『八重山朝日新聞』1962 年 8 月 25 日付。 ◆「地区署で白浜消防隊表彰」『八重山タイムス』1962 年 10 月 26 日付。
1963 (昭和 38)	●公民館長「昭和 38 年度 新里英一」(82 頁)。 ●島袋常夫「僕が白浜に来たのは昭和 38 年くらい」(36 頁)。 ◆「白浜部落に電灯」『八重山朝日新聞』1963 年 11 月 16 日付。
1964 (昭和 39)	◆「技術教室の建設を 白浜中竹富区教に陳情」『八重山タイムス』1964 年 9 月 22 日付。 ◆「技術家庭は「露天授学」 白浜中校から連合区に陳情」『八重山毎日新聞』1964 年 9 月 22 日付。 ◆「白浜校運動場拡張 公有水面埋立てを計画」『八重山朝日新聞』1964 年 9 月 29 日付。 ◆「日米琉三者が援助 西表白浜で埋立工事 小中校運動場の拡張に」『八重山タイムス』1964 年 10 月 22 日付。 ◆「白浜校の埋立 主席から免許」『八重山朝日新聞』1964 年 12 月 2 日付。
1965 (昭和 40)	●公民館長「昭和 40 年度 村山友吉」(82 頁)。 ◆「意欲的な校風づくり 西表 白浜に子供郵便局 貯蓄盛んな西表西部」『八重山朝日新聞』1965 年 2 月 1 日付。 ◆「白浜校庭埋立工事に」『八重山朝日新聞』1965 年 3 月 6 日付。 ◆「白浜校へ弁務官資金 九日、盛大に交付式举行」『八重山タイムス』1965 年 3 月 11 日付。 ◆「施設、設備の充実 白浜中、研究の中間発表」『八重山タイムス』1965 年 3 月 11 日付。 ◆「白浜のカキ養殖 やがて移出へ」『八重山タイムス』1965 年 7 月 3 日付。 ●下地昇「水道は昭和 40 年頃に全世帯に行き渡った。それまでは、レストラン白浜横の滝～家まで竹を利用して家に水を引っ張っていた」(38 頁)。
1966 (昭和 41)	●公民館長「昭和 41 年度 島尻恵良」(82 頁)。 ★「白浜港建設」。 ◆「白浜港調査に大浜係長来島」『八重山タイムス』1966 年 1 月 18 日付。 ◆「白浜港築港 六八年度に実施」『八重山タイムス』1966 年 1 月 22 日付。 ◆「白浜で十二メートルのイルカ 惜しくも捕り逃す」『八重山朝日新聞』1966 年 4 月 1 日付。 ◆「弁務官資金で電化の恩恵へ 西表白浜干立に四千弗」『八重山タイムス』1966 年 4 月 3 日付。 ◆「西表 二つの川に架橋 白浜棧橋も拡張 白保町長の帰任談」『八重山毎日新聞』1966 年 9 月 28 日付。 ◆「白浜築港・浦内、仲間川に架橋 西表開発一步前進 民政府補助で年度内で着工」『八重山朝日新聞』1966 年 10 月 14 日付。
1967 (昭和 42)	●公民館長「昭和 42-43 年度 村山友吉」(82 頁)。 ★「イリオモテヤマネコが国の天然記念物になる」。
1969 (昭和 44)	●公民館長「昭和 44 年度 加勢本全喜」(82 頁)。
1970 (昭和 45)	●公民館長「昭和 45 年度 兼久良次」(82 頁)。 ★「白浜港、浦内橋工事完成」。 ●玉代勢秀一「1970 年 22 才の時に横断道路工事に就くために、沖縄本島より幸八(コウハチ)丸という船に重機やセメントなどを積んで白浜に入ってきた。/ 丸信組という会社にて、約 2 年間白浜旧道より横断道路工事に携わった」(44 頁)。
1971 (昭和 46)	●公民館長「昭和 46 年度 上原喜栄」(82 頁)。 ★「電力が町営より沖縄電力に移管」。 ★「旧公民館落成」。 ●「港湾整備がなされ、立派な港に生まれ変わり、名称も白浜港と呼び変えた」(12 頁)。 ●7 月、写真「八重山開発事務員照屋八重子」(23 頁)。

1972 (昭和 47)	●公民館長「昭和 47-49 年度 大浜孫重」(82 頁)。 ●「西表島の大半が国立公園に指定され、国有林での伐採が出来なくなり、西表島の森林開発の歴史は終わりを告げた」(23 頁)。 ★「米ドルから円に通貨切替」。
1973 (昭和 48)	● 1/7 写真「八重山開発」(23 頁)。 ●写真「白浜小中 島村校長」(53 頁)。 ●写真「修学旅行」(53 頁)。
1974 (昭和 49)	● 1/20 写真「亀井先生」(53 頁)。 ● 2/8 写真「石垣オミト」(53 頁)。
1975 (昭和 50)	●公民館長「昭和 50-51 年度 大城清三」(82 頁)。 ● 1/15 写真「成人式 上原宏子」(70 頁)。 ● 4/2 写真「八重山開発」(23 頁)。 ●写真「白浜小中」(60 頁)。
1976 (昭和 51)	●写真「海神祭」(29 頁)。 ● 7/10 写真「旧白浜荘」(53 頁)。
1977 (昭和 52)	●公民館長「昭和 52 年度 大浜孫重」(82 頁)。 ● 5/4 写真「海神祭婦人科」(63 頁)。 ● 6/10 写真「海神祭」(63 頁)。 ● 7/31、宮国勝枝「台風 5 号」、「たまたま石垣にいた。(お盆をしに)/石垣から帰ってきたら、家の中も冷蔵庫の中もぐちゃぐちゃ。あの時代は予報等もないから台風が来るのがわからなかった。」(42 頁) ● 7/31、与儀清子「壊滅的な台風 / 当時は下水が無いから、私の家は床上浸水。 / 公民館に避難していた。 / 畳の上まで水が来ていたから、畳も取って捨てた。」(42 頁) ●屋良勲「昭和 52 年の台風で家浮いて流れていった、天井のはりからカヤを破って逃げた」(41 頁)。 ● 7/31、下地彦一「壊滅的な台風 / 家は崩壊。暴風の中、家を守るために突っ張り等をしていたが、潰れた。 / 暴風が止むまで、潰れた家の中でじっとしていた。 / 高潮もあり、被害が大きくなった。 / 白浜の海拔が低いところは水位が胸あたりまで来ていた」(41 頁)。
1978 (昭和 53)	●公民館長「昭和 53 年度 高橋寛」(82 頁)。
1979 (昭和 54)	●公民館長「昭和 54 年度 大浜孫重」(82 頁)。 ●屋良勲「部落対抗が始まったのは僕が公民館の総務をしている時(昭和 54、55 くらい)に船浮集落にお願いして白浜対船浮が始まり、翌々年くらいから祖納・干立も参加」(30 頁)。
1980 (昭和 55)	● 2/10 写真(48 頁)。 ●写真「白浜」(48 頁)。 ●写真「子供 4 人ピース」〈仮題〉(55 頁)。 ●写真「ハーリー」、「ハーリー」、「ハーリー」、「ハーリー」(63 頁)4 枚。 ●写真「ハーリー」(64 頁)。 ●写真「海神祭 婦人」(64 頁)。
1981 (昭和 56)	●公民館長「昭和 56 年度 中原政二」(82 頁)。
1982 (昭和 57)	●公民館長「昭和 57- 平成 5 年度 加勢本」(82 頁)。
1984 (昭和 59)	★「白浜校体育館完成」。 ◆「薬師丸ひろ子主演映画 「現代版・二十四の瞳」 西表白浜を舞台にロケ」『八重山毎日新聞』1984 年 2 月 8 日付。

1985 (昭和 60)	● 3/20 写真「白浜新栈橋工事 白浜港物揚場」、「白浜新栈橋工事」(49 頁)。 ● 写真「屋良 - 元休憩場」(49 頁)。
1986 (昭和 61)	● 屋良勲(海神祭に)「優勝旗が用いられた」(30 頁)。 ● 写真「白浜校運動会 仲立、藤原、仲宗根、島本、橋間」(61 頁)
1987 (昭和 62)	● 10/10 写真「海邦国体聖火リレー」(74 頁)。 ● 10 月写真「海邦国体聖火リレー」(74 頁)。 ● 10/18 写真「白浜新栈橋」(74 頁)。 ● 10/18 写真「第一回ばいぬしま祭り」(74 頁)。 ● 写真「海神祭」(64 頁) ● 写真「白浜県道(右・今のまんさく)」(49 頁)。
1988 (昭和 63)	● 5/4 写真「海神祭」(64 頁)。 ● 5/4 写真「海神祭婦人会余興」(64 頁)。 ● 6/15 写真「海神祭 比嘉賀豊」(65 頁)。 ● 6/15 写真「海神祭 屋良ともよ」(65 頁)。 ● 写真「海神祭会場入り口」(64 頁)。 ● 写真「海神祭?」(65 頁)。 ● 写真「海神祭」(65 頁)。 ● 写真「海神祭 2」(65 頁)。 ● 写真「海神祭 婦人会」(65 頁)。 ● 写真「海神祭 婦人会 2」(65 頁)。
1989 (平成元)	★「西表トンネル工事着工」。 ● 写真「海神祭」(66 頁)。 ★「西表群発地震発生」。
1990 (平成 2)	● 4/5 写真「白浜港」(60 頁) ● 12 月、写真「仲原の前」(49 頁)。
1991 (平成 3)	● 3/7 写真「西表トンネル工事」(50 頁)。 ● 3 月写真「西表トンネル工事」(50 頁)。 ● 5/4 写真「海神祭」(29 頁)。 ● 8 月写真「旧道前」(50 頁)。 ● 9/27 写真「白浜校運動会、大城ツル子」(56 頁) ● 10/20 写真「道路工事(金城前)」(50 頁)。 ● 11/20 写真「金城旅館前道路」(50 頁)。 ● 11/20 写真「金城旅館屋上より」(50 頁)。 ● 11/20 写真「金城旅館屋上より(屋良商店前)」(51 頁)。 ● 11/20 写真「トンネル前道路」(51 頁)。 ● 12/3 写真「トンネル前」(51 頁)。 ★ 12/12「西表トンネル貫通式」。
1992 (平成 4)	● 3/5 写真「屋良商店前道路」(60 頁)。 ● 3/5 写真「学校前」(51 頁)。 ● 4 月写真「西表トンネル 1」(51 頁)。 ● 4 月写真「西表トンネル 2」(51 頁)。
1993 (平成 5)	★ 1/20「西表トンネル開通式」。 ● 1 月写真(51 頁)。 ● 9/15 写真「白浜老人ゲートボール」(72 頁)。 ● 11/7 写真「西表トンネル赤崎出口」(51 頁)。 ● 11/7 写真「定期バス」(8 頁)。 ● 写真「西表トンネルが開通したことにより住民を含め観光客の往来も便利さを増した」(12 頁)。

1994 (平成 6)	●公民館長「平成 6-7 年度 仲村貞子」(82 頁)。 ●7/18 写真「下地洋子・石垣夫妻」(56 頁)。 ●写真 9/15「ゲートボール」(7 頁)。 ●写真 9/15「敬老の日」(68 頁)。 ●写真 9/15「敬老会 3」(68 頁)。 ●10/6 写真「ゲートボール」(72 頁)。 ●10/6 写真「仲宗根」(72 頁)。 ●11/2 写真「白浜セメントセンター」(52 頁)。 ●11/10 写真「白浜保育所」(62 頁)。 ●写真「白浜運動会」(61 頁)。
1995 (平成 7)	●2/18 写真「卒業リレー 美田良」(74 頁)。 ●2/18 写真「卒業リレー トンネル出口」(74 頁)。 ●2/18 写真「卒業リレー」(75 頁)。 ●6/1 写真「海神祭」(66 頁)。 ●7/14 写真「やまねこマラソン横断幕」(8 頁)。 ●8 月写真「下地の横の道路 トンネルに続く道」(52 頁)。 ●8 月写真「屋良」(56 頁)。 ●写真「白浜運動会」(61 頁)。 ●写真「白浜校」(61 頁)。
1996 (平成 8)	●公民館長「平成 8-14 年度 大城一文」(82 頁)。 ●1/5 写真「消防団」(71 頁)。 ●5/3 写真「池城政男」(56 頁)。 ●写真「出初式を見守る婦人」(71 頁)。
1997 (平成 9)	●2/20 写真「保育所」(62 頁)。 ●2/27 写真「坂口さん 古見岳 77 才」(56 頁)。 ●写真「やまねこマラソン」(56 頁)。 ●写真「やまねこマラソン」(75 頁)。 ●3 月「空撮」(76 頁)。 ●3 月「白浜保育所」(62 頁)。 ●9/15 写真「敬老の日」、「敬老の日」(68 頁)。 ●12/14 写真「老人ゲートボール」(72 頁)。
1998 (平成 10)	●1/8 写真「白浜公民館」(57 頁)。 ●2/14 写真「やまねこマラソン折り返し」(75 頁)。 ●2/14 写真「やまねこマラソン婦人」(75 頁)。 ●2/14 写真「やまねこマラソン」(75 頁)。 ●5/29 写真「海神祭」(66 頁)。 ●8 月写真「グランドゴルフ 1」、「グランドゴルフ」(72 頁)。 ●9/15 写真「敬老の日」、「敬老の日こども」(69 頁)。

1999 (平成 11)	● 1/3 写真「成人式」(70 頁)。 ● 5/20 写真「島袋」(56 頁)。 ● 5/27 写真「ゲートボール大会」(72 頁)。 ● 6/17 写真「海神祭婦人」(66 頁)。 ● 6/17 写真「海神祭 婦人余興」(66 頁)。 ● 7/3 写真「軽トラ」〈仮題〉(52 頁)。 ● 7/3 写真「男 3 人」〈仮題〉(57 頁)。 ● 8/15 写真「ゲートボール」(73 頁)。 ● 11/18 写真「実践発表会？」(71 頁)。 ● 11/27 写真「老人会」(71 頁)。 ● 写真「海神祭 仲宗根」(66 頁)。 ● 写真「50 周年海神祭」(66 頁)。
2000 (平成 12)	● 3 月写真「白浜校庭」(60 頁)。 ● 6/10 写真「自転車大会」(71 頁)。 ● 6 月写真「海神祭」(67 頁)。 ● 8/7 写真(52 頁)。 ● 8/18 写真「白浜校」(60 頁)。 ● 9/15 写真「公民館」(69 頁)。 ● 写真「卒業式」(71 頁)。
2001 (平成 13)	● 2 月写真(52 頁)。 ● 2 月写真「白浜小中」(52 頁)。 ● 6/24 写真「海神祭」(29 頁)。 ● 8/11 写真「石垣にて」(73 頁)。 ● 8/13 写真「三世代ゲートボール」(73 頁)。 ● 9/15 写真「白浜・敬老祝賀会(白浜公民館)」(69 頁) →大城清三さん、石垣高穂さん、石垣トミさん、屋良ハツさん、金城節さん、橋間良子さん、高田恵美さん、伊藤哲夫さん、大城ツル子さん、高江洲吉子さん、大城公民館長挨拶、進行役の屋良さん、大城さんお礼の言葉。
2002 (平成 14)	● 2/9 写真「やまねこマラソン」(75 頁)。 ● 6 月写真「海神祭」(67 頁)。
2003 (平成 15)	● 公民館長「平成 15-16 年度 屋良勲」(82 頁)。 ● 1/29 写真「保育所」(62 頁)。 ● 10/12 写真「白浜校運動会」(61 頁)。 ● 10/20 写真(52 頁)。
2004 (平成 16)	● 5/15 写真「阿久津結婚式」(71 頁)。 ● 5/15 写真「阿久津結婚式 裕子」(71 頁)。
2005 (平成 17)	● 公民館長「平成 17-20 年度 大城一文」(82 頁)。 ● 1/6 写真「消防団」(9 頁) ● 写真「海神祭婦人巻踊り」(67 頁)。 ● 10/16 写真「白浜校運動会」(61 頁)。
2006 (平成 18)	◆ 「3 年ぶりに白浜芸能祭 青年会奮闘、地域に元気」『八重山毎日新聞』2006 年 12 月 18 日付。 ● 写真「南洋浜千鳥 平成 18 年 海神祭」、「南洋浜千鳥 平成 18 年 海神祭」(36 頁)。
2007 (平成 19)	● 4/25 写真(52 頁)。

2008 (平成 20)	● 1/6 写真 (9 頁)。 ◆「今年も青年会が熱演 にぎやかに白浜芸能祭 伝統芸能に劇、観客とかけあいも」『八重山毎日新聞』2008 年 12 月 16 日付。
2009 (平成 21)	● 公民館長「平成 21 年度 大浜和重」(82 頁)。 ● 1/29 写真「白浜学校」(60 頁)。
2010 (平成 22)	● 公民館長「平成 22- 令和元年度 大城一文」(82 頁)。
2011 (平成 23)	★「白浜中学校が西表中学校に統廃合され白浜小学校になる」。 ● 写真「海神祭ハーリー」(67 頁)。
2014 (平成 26)	● 写真「海神祭 優勝旗」(30 頁)。 ◆「西表白浜青年会は勇壮に 節目の芸能祭に大きな拍手」『八重山毎日新聞』2014 年 12 月 24 日付。
2017 (平成 29)	★ 6/14「船揚場管理組合設立」。 ★ 8/15「白浜神社竣工遷座祭(老朽化のため)」。 ● 写真「現在の神社(③)(鳥居)平成 29 年に建て替え」(28 頁)。
2018 (平成 30)	★「海人の家敷地内に公民館用の調理施設完成」。
2019 (令和元)	★ 5/1「元号が平成から令和に変わる」。
2020 (令和 2)	● 公民館長「令和 2 年度 屋良誠一」(82 頁)。 ★「新型コロナウイルスが猛威をふるい世界規模で緊急事態となる」。 ★ 6/24「コロナのため海神祭は集落のみで執り行った」。 ● 6/24 写真「海神祭」(66 頁)。 ●「新型コロナウイルスの世界的蔓延に伴い観光客は激減し自粛ムードの中、海神祭も集落だけの小さな行事となることを余儀なくされた」(13 頁)。
2021 (令和 3)	● 8/11 写真「空撮」〈仮題〉(89 頁)。 ★「海神祭は昨年同様、コロナ緊急事態宣言により集落のみで執り行った」。 ★「浦内橋架け替え工事始まる」。 ●『我が白浜』(白浜公民館)発行。 ● 写真「海神祭」(63 頁)。
2024 (令和 6)	◆「白浜小児童が田植え体験―最後までがんばれた―」『八重山毎日新聞』2024 年 3 月 18 日付。 ◆「「白浜婦人学級」閉級式で講師に感謝―舞台化粧や祝い膳学ぶ―」『八重山毎日新聞』2024 年 3 月 18 日付。 ◆「白浜老人クラブが優勝 竹老連 GG 大会 一夜は芸能交流も―」『八重山毎日新聞』2024 年 7 月 8 日付。

〈資料紹介〉

大原公民館会務綴 一九五六年度

四月十一日 年度始總會開催

十五日 南風見田、大保良田イモチ病発生の報に依り新普及員来島調査

十六日 大原―豊原間道路補修、並農道、猪垣補助金陳情及イモチ病薬品□無償配付交渉のタメ会長副会長産業部長、石垣へ出張

十七日 イモチ病駆除のタメ地方庁経済課本若氏新普及員来島

十八日 南風田イモチ病駆除実施 同日野串駆除を実施す(南風見田原)

二十日 大保良田イモチ病駆除 同日大原地区野串駆除を実施ス

二十三日 大浜津呂氏来島

二十二日 大原命名十週年記念式並に敬老会実施 竹林除草午前作業

五月一日 立法院一行来島 部落民に依る陳情書を提出

七日 有線電話架設のタメ技術員来島 五月二十日電話開通

十一日 春季清契検査実施

五月十日 第二回野串駆除実施

五月十五日 税務所より納税完納者表彰のため、崎枝氏来島 受賞者

西大舩高一 白保英良 両□

十六日 大浜中学旅行生来島

二十一日 白保中学旅行生来島

二十二日 保健所代採作業同時臨時總會 区長攻選並にPTA会計選出ス 区長に横目□弥氏 PTA会計に宮城善一氏

二十三日 中間橋開通祝賀並に有線電話開通式同祝賀会

六月八日 文化映画開催

七月六日 町役所より友利氏来島 和牛ダニ区除実施

□月十五日 豊年祭

七月九日 琉球民政府より衛生技師一行来島

二十九日 竹富町連合青年陸上競技大会大原小学校 竹富町長来島

八月二十二日 農道補修作実施

九月二十二日 保健所差分式マラリヤ撲滅作業の三等賞ヲ受ケル金

六〇〇円を受く

九月十九日 結願祭

十月八日 ブロナー民政官八重山地方庁長一行来島

九月二十九日 節祭

二十五日 種牛割当交渉のタメ会長石垣へ出張

十一日 文化映画開催

十五日 アメリカ軍上陸演習開始

二十日 八重山警察署長一行来島

十一月三日 封鎖預金等書類提出及種牛交渉のタメ会長副会長石垣へ

十三日 臨時總會開催

十二月三日 櫻井博士来島

一月八日 臨時總會開催

十二月五日 教育税完納運動開始

一月十五日 成人の日 成人式祝賀会開催 農道補修作業実施 馬車

総動出 無償提共

二月二十六日 臨時總會開催

三月二日 復旧工事予定箇所調査書並耕地面積調査提出のタメ区長

石垣□

二十二日 大浜津呂氏来島

二十三日 田植修了祝賀会開催

姉妹町交流 50 年のあゆみ展

－ 斜里町・竹富町姉妹町盟約 50 周年記念事業 －



離を改めて感じます。



知床博物館学芸員 臼井平さん（左）、三枝大悟さん（右）

姉妹町のあゆみ

昨年、竹富町は北海道斜里町と姉妹町盟約を結んでから、50 周年を迎えました。1973 年（昭和 48）1 月 10 日、日本列島の東北端と西南端に位置し、両町とも国立公園を抱える繋がりから、姉妹町の盟約書を取り交わしました。1993 年（平成 5）には、姉妹町盟約 20 周年を記念して斜里町に「姉妹町・友好都市交流記念館」が建設され、知床博物館学芸員の皆さんが竹富町内から収集した多くの資料が展示されています。

昨年（令和 5 年）は姉妹町盟約 50 周年を迎え、両町では、国立公園の観光開発、自然保護等共通する諸問題についての意見交換や、教育、文化、スポーツ、産業などあらゆる分野での交流を通じて、行政や民間のレベルでのさらなる友好の輪を広げています。

写真展「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」

今年 2 月、姉妹町盟約 50 周年記念事業の一環として、「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」（竹富町・弘前市との交流を進める会：主催）が知床博物館で開催されました。

「竹富町・弘前市との交流を進める会」では、

写真展

「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」を通して

主催：竹富町・弘前市との交流を進める会

共催：竹富町・斜里町

北の国から

日本一早い海開き目前とはいえ、まだ肌寒さの残る 3 月の竹富島。「久しぶりにこんなに色鮮やかな景色を観ることができました。」「北海道では、花どころか、緑色の草さえ、何か月も見られませんかからね。」

竹富島を訪れた知床博物館学芸員の臼井さんの一言です。「今日は少し肌寒いですね。」と言った自分が恥ずかしく感じるほど、彼らの暮らす斜里町の真冬の最低気温は、想像を上回るマイナス 20℃！ はるか 3,000 km 北にある斜里町との距

当初2月と5月に斜里町のみで展示を行う計画だったようですが、竹富町からの「町民号」訪問のなかで、知床博物館への視察があるということで、急遽、写真展が延長されたといえます。このような流れから、自然と竹富町内（竹富島、西表島西部地区、町役場を予定）での展示が実現することになりました。

あゆみ展を主催した「竹富町・弘前市との交流を進める会」（村田良介会長）のご厚意で、写真パネル約 60 枚をお借りすることができました。写真は、昭和 48 年の盟約締結から、児童交流、芸能交流、農業交流、漁業交流、物産展、成人式など実に多くの交流の場面が撮影されています。その一つひとつの積み重ねが、相互の友情と理解を深めており、3,000 km の距離と 50 年の時間が現在に繋がっていることを実感できるものでした。

写真展開催にあたって

竹富町内での開催にあたり、開催準備と町内視察を兼ね「竹富町・弘前市との交流を進める会」の村田良介会長、斜里町役場元職員でもある今井郁子さん、斜里町立知床博物館学芸員の三枝大悟さん、白井平さんの4人の皆さんが竹富島を訪れました。竹富島の真っ赤なデイトと赤瓦、ブーゲンビリアはますます鮮やかに咲き誇っています。冒頭の白井さんの一言は、私たちが日ごろ見慣れているこの景色が、当たり前ではないことを気付かせるものでした。



斜里町元職員 今井郁子さん

三枝さん、白井さんは、その後西表島に渡り、宇多良炭坑や内離島、浦内川の調査をして斜里に戻られました。

「誘い」とリレーエッセイの掲載

竹富島、西表島西部、町役場での開催周知のため、『八重山毎日新聞』に2回にわたり「誘い」を掲載しました。また、「竹富町・弘前市との交流を進める会」の村田良介会長、今井郁子さん、斜里町立知床博物館学芸員の三枝大悟さん、白井平さんの4人の皆さんに、リレーエッセイをご寄稿いただきました。

この報道により大勢の方から「1日でもいいから、ぜひほかの島でも見せてほしい」、「竹富町の人たちは、斜里町のことを知らない人が多いよね。この機会に各島じまでも開催してほしい」とのご要望をいただき、当初の計画になかった地域でも開催することとなりました。

写真パネルの旅

パネルをお借りした当初は、ゴールデンウィークに入る前には返却する約束でしたが、返却期間を延長させていただき、竹富島（3/8～18）、西表西部（3/25～30）、黒島（4/13）、小浜島（4/20）、波照間島（4/26）、西表東部地区（5/2）、竹富町役場（5/7～10）鳩間島（5/18）と、予定していた3か所を上回り、町内での開催は合計8か所、最終ステージ「ゆめホール知床・ロビー展」（6/1～16）で、パネルの長い長い旅は終わることになりました。

村田会長より、「ゆめホール展示期間中の来館者数は3,560人で、ゆめホールによるロビー展見学者数の推計は1,153人という結果。なかには、最終日の片づけ中においでいただき、私たちがあわてて箱から目的の写真を出して『写メ』していただく場面もありました。この方は、平成20年にそちらを訪問した『川上小学校リコーダークラブ』のメンバーのお母さんでした。今回の写真パネル

と複写したデータは既にお送りしていますが、記念事業の成果として保管しておきます。今後の活用など必要なことがあればご連絡ください。」と、お返事をいただきました。

また、いつかパネルたちが旅に出る日のために、今回旅の記録を残しておきます。

写真パネル展あれこれ ―赤瓦民家とサバニ舟のこと―

「姉妹町・友好都市交流記念館」のひとときを引く展示物に、赤瓦屋根の竹富島の民家とサバニ舟、小浜島の獅子などがあります。

1993年（平成5）、記念館開館のために竹富町内各地で展示資料の収集に携わった村田会長によると、赤瓦の民家は、竹富島の西盛家を実測し、竹富島から職人を呼び、材料を揃え、記念館で組み立てたとのこと。一連の作業の経過も写真で観ることができました。

また、サバニ舟は西表島祖納で収集した舟を、地元で収集したその他の資料と一緒に運搬して輸送してきたとのこと。聞くだけでも気の遠くなるような作業工程を、わけない作業の如く楽し気に語る村田会長の説明に、ただただ呆然とするばかり。



サバニ運搬時の解説をする村田会長（知床博物館 2月21日）

実は、このサバニ舟については、舟の持ち主だった方にまつわる話や、進水式にまつわる話など、この後も様々なエピソードで繋がっていくことになるのですが、この詳しいお話しは別の機会に報告したいと思います。

サバニ舟の一連のエピソードを、村田会長と共有したところ、「サバニの全体の繋がりが見えてきた気がします。サバニを保存してだけでなく、このサバニがたどってきた歴史（舟人生）も併せて記録していくことの意味を改めて感じています。展示室での説明の幅がまた一段と広がりそうです。新たな情報などがあった時には引き続きよろしく願いいたします。」とお返事をいただきました。この先、竹富町とのつながりや、展示資料を丁寧に説明している知床博物館の職員の皆さまの姿が目につかびます。

（米盛恭子）

誘い（八重山毎日新聞掲載）

写真展「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」

北海道斜里町と竹富町が、姉妹町締結の盟約を交わし 50 年の歳月が過ぎました。この半世紀にわたる姉妹町の交流をふりかえる写真展「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」を、3月8日から 18 日まで、竹富島ビジターセンター「ゆがふ館」で開催します。

両町はそれぞれ北東端・知床国立公園と南西端・西表石垣国立公園を抱えていることから、1973 年 1 月 10 日、東京で盟約調印式を行ないました。その後、両町はお互いに約 3000 キロメートルという遠隔の地にあっても、両町民、児童生徒が相互に訪問しあい、交流・親睦を深めてきました。そのことは写真にうつる多くの笑顔が証明してくれることでしょう。

また、両町の交流は行政主導のものに留まらず、

家族ぐるみの交流も生まれ、その輪はどんどん広がっています。当初は自然保護を念頭に置いた姉妹町の盟約ですが、両町の文化・芸能、物産を通じた交流など、多方面にわたっています。また50年の歴史をふりかえると、斜里町による漁業技術の指導、援農青年の派遣などを通じ、竹富町の現実的な課題の克服にも力を貸してくれたこともありました。

現在は、斜里町を含む知床が2005年に、西表島を含む「奄美大島、徳之島、沖縄島、沖縄島北部及び西表島」が2021年に世界自然遺産に登録され、両町の関係は新たな局面を迎えています。近年の自然保護に対する社会的な関心の高まりとともに、斜里町と竹富町が姉妹町であることの意味合いは、ますます重要性を帯びてくるものと思われます。

本展示では、斜里町・竹富町の交流を広く伝えるとともに、姉妹町のさらなる親睦・交流の継続を願い、さらなる50年後の明るい未来を展望します。多くの方にご覧いただきたいものです。



と き 3月8日(金)～18日(月)

ところ 竹富島ビジターセンター「ゆがふ館」
(8時～17時開館)

問合せ Tel 0980-87-6257 (竹富町教育委員会)

共 催 「竹富町・弘前市との交流を進める会」
(斜里町)、斜里町、竹富町

竹富町教育委員会 飯田泰彦

写真展「姉妹町交流 50 年のあゆみ展」

1973年に竹富町と北海道斜里町が姉妹町盟約を結んでから、昨年は50年を迎えました。

姉妹町盟約50周年記念事業として、「姉妹町交流50年のあゆみ展」が、今年2月斜里町立知床博物館で開催されました。その後、知床博物館の写真パネルは、海を渡り今月18日まで竹富島で、さらに3月25日から30日まで、西表島祖納公民館で展示されることになりました。

写真は言葉で説明する以上に多くの情報を与えてくれます。姉妹町盟約締結の瞬間はもとより、1993年知床博物館に併設された「姉妹町友好都市交流記念館」のオープンセレモニーで、テープを切る小浜島の2頭の獅子の姿や、1994年マンタピアに両町合同で出場したハーリーの様子、バスケットボールやスキー体験を楽しむ児童交流の様子、知床博物館に展示されている竹富島の赤瓦民家や、西表島から移送されたサバニ舟など、人やモノを通じた両町の50年間の交流の歴史が生き生きと写し出されています。

さて、斜里町には「竹富ファンクラブ」という会があるようです。三線や踊り、機織り体験や祭りへの参加、手作りの歓迎会や物産展など、姉妹町の交流には普段の旅行とは異なる繋がりが生まれていることを再認識させられます。先日、斜里町を訪れた際に「竹富町」の名前を耳にした方が「うちの祖父が漁師でさ、漁協で昔竹富に行ったと言ってたなあ。自分もいつか行ってみたいな。」と話していました。

今回の写真展は、これまでの姉妹町のあゆみを地域の皆さまに一番近くでお届けできる機会だと思います。「斜里町ファン」のひとりとしましては、斜里町に行ったことがある方には懐かしく、行ったことのない人も訪れてみたくなるような写真展になっていると思います。この機会にぜひ足をお運びいただき、日本の北と南に暮らす人と自然と文化が織りなす交流の歴史をご覧いただきたいと思っています。



と き 令和6年3月25日(月)～30日(土)
 ところ 西表島祖納公民館
 問合せ 0980-87-6257 (竹富町教育委員会)
 共 催 「竹富町・弘前市との交流を深める会」
 (斜里町)、斜里町、竹富町
 竹富町教育委員会社会文化課町史編集係
 米盛恭子

斜里町・竹富町の絆リレー・エッセイ —「姉妹町交流50年のあゆみ」 巡回展の開催にあたって—

北海道斜里町と竹富町が1973年に日本列島の両端の国立公園を有することから、姉妹町の盟約を結んで50年余の歳月が過ぎた。現在、両町と「竹富町・弘前市との交流を進める会(斜里町)」共催の写真展「姉妹町交流50年のあゆみ展」が、3月開催の竹富島展、西表島祖納展に引き続き、竹富町の島々を次の日程で巡回中である。また、5月7日から10日まで、竹富町役場ロビーでも催される。

4月13日(土) 黒島伝統芸能館(黒島)
 20日(土) 小浜公民館(小浜島)
 26日(金) 波照間農業集落センター(波照間島)
 5月2日(木) 離島総合センター(西表島大原)
 5月7～10日 竹富町役場ロビー

写真展開催につき、斜里町立知床博物館学芸員、「竹富町・弘前市との交流を進める会」のメンバーによるエッセイ「斜里町・竹富町の絆」をリレーしたい。

絆 竹富町・弘前市との交流を進める会

元斜里町職員 今井郁子

交流のはじまり

私と竹富町との交流の始まりは、竹富町と斜里町が姉妹町の盟約を結んだ、昭和48年1月10日から5日後に迎えた成人式です。同時に、竹富町でも成人式が挙行されており、盟約記念として成人を迎えている方と電話交流することとなり、お話をさせていただきました。当時の私は、竹富町の知識もあまりなかったので、中身の無い話をしたように思います。残念ながら話の内容は覚えておりませんが、気温の差だけはビックリ!!したので覚えております。たしか、気温差が40度近くあったと思います。こちらは、この時期流水が押し寄せ、気温が-20度以下になることもしばしばある時期ですから…。



成人式電話交流以来の再会

電話相手とのご対面

平成10年10月、盟約から25年が経過した頃、斜里町職員である私は、職員研修(自由研修)で竹富町を訪問しました。手厚い歓迎会のなかで

挨拶をさせていただいた際に、私が「実は、成人式で竹富町の職員の方と電話交流を…」と話をしますと、竹富町職員の男性一人が「俺かも?」と名乗ってくださり、感激の対面をさせていただきました。

竹富愛のはじまり

平成10年の訪問が「竹富愛」の始まりとなり、翌年にはプライベートで八重山産業まつりに斜里のヨサコイチームの一員として参加しました。また、同年開催された「ぱいぬ島祭り」には、よさこいチームが竹富町から招聘され、竹富町皆様の大歓迎を受け、感激と感動で交流が深まってきている感じがうかがえました。

歌と踊りの交流 —ヨサコイと三線—

竹富町と言えば、どの島を訪れても三線の音色が聞こえてきます。斜里町民の皆様に三線の音色を聞かせたいと、竹富島の地唄いメンバーに斜里町での「三線ライブ」と三線を教えてもらえないか打診したところ、快く了解を得てすぐに実現しました。

この「三線ライブ」の盛況をきっかけに、「しれとこ美ら三線クラブ」が発足し、本場竹富島での三線交流も行われるようになりました。三線クラブは現在もイベント等に出演し、南国の雰囲気斜里町民に届けております。メンバーの一人が「デンスー節」の大会に出たいといって、三線の腕を磨いている姿を見ると、ここでも交流の輪が広がっている感じがします。

産業交流のはじまり

仕事での関りでは、平成15年、盟約30周年の夏祭りに竹富町物産展コーナーを設け、パイナップルとマンゴーの即売会を開催しました。平成20年度には、斜里町130年・姉妹町竹富町との盟約35周年の記念事業の担当であった私はかなり力が入り、「知床の水で泡盛を造る」と計画を立案

しました。

来運地域の湧き水で、「この水を飲むと運が来る」という水を利用し、「来運の水で泡盛を造る!」と、思い立ったら吉日、すぐに休暇を取り、来運の水を片手に、知り合いのいる石垣島の八重泉酒造を訪ねました。来運の水が泡盛に適しているかどうか調べてくれることとなり、斜里に戻ったところで、来運の水を割水として使用できるとの連絡を受けました。そして、記念事業の一つ「泡盛知床の水仕込『の』」として、2,000本限定で製造していただきました。竹富町の方々・斜里町民に販売したところ、即完売になりました。

先日、我が家でも密かに眠っておりました「の」を、15年ぶりに出して飲んでみると、まるやかでとても美味しい古酒になっておりました。



泡盛「来運の泉」 来運公園での撮影

友好の絆 一層深く

石垣島からフェリーで各島に渡ると、どこからとなく「お帰りなさい」と声をかけてくださる方がいます。私も、「ただいま」と返し笑顔で挨拶する、その関係ってすごいなと、今さらながら思います。両町の距離は3,000キロありますが、心はいつもすぐそばにある関係。「親戚」ではなく、「家族」のような「絆」で結ばれていると、50年を経て心から思っております。

これから先も、両町の「友好の絆」を一つずつ刻んでいって欲しいと願います。

YOUは何しに竹富へ？ ―絆に助けられて―

斜里町立知床博物館学芸員（歴史・民俗担当）

三枝大悟

とにかく、行くことだけは決まっていた―

「三枝くん、年度内に竹富に行ってもらおうから」。

1年前の4月、斜里町立知床博物館に採用された私は、館長の言葉に小躍りした。仕事で竹富に行けるなんて、ラッキー以外の何モノでもない。

しかし日が経つにつれて、この出張予定がだんだん心の重荷になってくる。博物館での私の担当分野は、歴史と民俗。とはいえ、相手は分厚い先行研究が蓄積された豊かな伝統文化をもつ竹富だ。一週間弱の滞在期間しかない私が太刀打ちできるわけがない。果たして、何をしにいけないのか。



西表島での調査

何だかんだで見えてきた目的

斜里町は他所様のことが大好きなまちだ。毎年夏には、友好都市の青森県弘前市から伝授された「しれとこ斜里ねぶた」が夜空を彩り、知床博物館併設の「姉妹町友好都市交流記念館」には竹富島に今も変わらずある赤瓦民家が原寸大で再現されている。博物館での仕事に少しずつ慣れ、「異なる地域の姿を通して地元を考える機会を作る」という、交流記念館建設の理念を繰り返して語るなかで、私が竹富で何をすべきかが見えてきた。

斜里を含むオホーツク地域は砂糖の原料となるビートの一大産地である。一方、竹富にはサトウ

キビがある。斜里には江戸時代、津軽藩の侍たちが異国警備に訪れたが、先島には海上を監視する遠見台が設けられた。世界自然遺産の知床と西表島では、かつて前者で硫黄鉱山、後者で石炭鉱山が開かれた。3,000km離れた竹富と斜里は全く違う世界に見えるが、似ているところもきつとある。それを斜里の人たちに伝えることが、私の役割ではないか。

助けてくれた絆

ようやく旅の目的が決まったが、さて、それをどう実行すればよいかはわからない。何せ初めての竹富行きである。

そこでまず、斜里にある「竹富町・弘前市との交流を進める会」に助けを求めた。斜里町役場OB・OGが中心となって企画した写真展を竹富町の各島で開催するという。彼らの移動に同行したことで、半世紀にわたって続く交流の中心人物たちと知り合うことができた。

さらに助けになったのが、竹富町教育委員会の方々だ。『竹富町史』の編集・刊行や文化財の保護・活用を進める彼らは、いうまでもなく地域の人材に詳しい。

その紹介のおかげで、たくさんの方のご協力のもと、製糖工場の見学ではその迫力に感動し、遠見台に迷わず辿り着き眺望を実感し、時代を超えた複数の炭鉱跡を巡ることができた。私の調査は全て、これまで紡がれてきた絆によって支えられたのだ。

持ち帰ってきたモノ

今、交流記念館の収蔵庫には西表島で拾ってきた、石炭や陶磁器のカケラ、サイダーの瓶がある。出迎えてくれた館長は、それらを満面の笑みでビニル袋から取り出す私に、「何それ、ゴミ？」と怪訝そうに問いかけた。「失礼な」、と答えかけるが、実際そうなのだ。これらは人々に捨てられて、または見落とされて、偶然残ったものにすぎない。

しかし私にとっては、竹富と斜里の歴史をつなぐ宝物だ。これらがあるだけで、当時の人々が求めた石炭の形を、暮らしのなかで使った食器の模様を、疲れ果てながら喉を潤した姿を、斜里の人々に伝え斜里の歴史と並べることができる。

先人たちから受け継ぎ、竹富で私自身も得ることができた絆により、新たに加わった「竹富関係資料」。その魅力をどんな形で発信しようか。炭鉱跡から帰った夜、ホテルの浴室で、眠い目をこすりながらそれらを洗い、磨き、一人ほくそえんだあの夜から、楽しく頭を悩ませ続けている。



西表島炭坑収集品

3,000 キロの海をつなぐ、生物と絆

斜里町立知床博物館学芸員（生物担当）

白井 平

実感する絆

「斜里町と姉妹町の町はどこ?」と聞くと、教室の半数以上の児童が「竹富町!」と手を挙げる。私が斜里町内の学校で担当している授業「世界遺産学習」で的一幕だ。町外出身者でかつ、斜里町に住んでわずか2年目の私にとって、斜里町と竹富町の絆の深さは驚異的ですからある。授業中、そんな児童たちの竹富町に対する好奇心に溢れた視線を感じるたびに、私は文献上でしか知らない世界遺産西表島の自然を、生きた自らの言葉で語れないことに自信を持てずにいた。「日本のガ

ラパゴス諸島」とも称される竹富の自然を、斜里町民へ伝えられるようになるべく、3月6日、私は西表島の地へ向かった。

生物多様性の西表島

私は魚類、特に淡水魚の進化についての研究をしてきた。かの有名な『進化論』の著者チャールズ・ダーウィンの足跡を辿るような学問だ。そんな私にとって、一つの川に400種類もの淡水魚が生息している西表島は、生物進化の答えが無数に散らばる楽園である。斜里町を流れる最大の河川である斜里川で、現在確認されている淡水魚は、わずか18種類である。西表島の20分の1だ。



西表での調査の様子

潮汐の影響と種多様性

実際に竹富町教育委員会の方から紹介いただいた地元の青年によるガイドで、西表島のいくつかの河川を歩きながら魚類の採集を試みた。そこで生物進化に繋がる特徴をひとつ見ることができた。それは潮汐の影響力である。

西表島では、たとえ小さな川においても長大な流域において干満の影響が出る。浦内川においては、なんと河口から11km上流までが汽水域だ。そのため1本の河川内で流量と塩分濃度にグラデーションが生じる。この現象が異なる無数の微環境を生み出した結果、それぞれの環境に適した魚が種分化していったのだろう。同じ河川内で採集するポイントを少し変えただけで、掬うたびに違

う魚種が捕獲できるのは実に楽しかった。知床周辺を流れるほとんどの河川で、汽水域は 100 m～500 m 以内でしか形成されないし、採捕される魚種が少ないのは前述の通りだ。

圧倒的な生物多様性を感じた一方で、種の存続について「危うさ」も感じた。北海道に生息する淡水魚は、種数は少ないものの、1 種が占める資源量が多い。魚種によっては 1 種類の魚が川面を黒く塗りつぶすほど見ることもできる。

しかし、西表島の魚はそれぞれの環境でそれぞれ異なる種類の魚が見られるものの、ひと掬いで捕獲できる数は実に少ない。小規模な異なる環境に、そこに適した限られた数の魚種が生息しているイメージだ。ほんのわずかでも潮位が変わったら、マングローブが砂で埋まったら、温暖化が進んでしまったら、いったい何種類の魚が姿を消すのだろう。西表島に生息する淡水魚種の約 20% が稀少動物として選定されている意味を深く考えさせられた。

魚を通じて築けた絆

今回、終始ガイドを引き受けてくれた西表島の青年に上記のことを話していると、「北海道の川魚が見たい」という。驚いたことに、私が竹富町から帰る 3 日後に斜里町へ来る予定だというのだ。

私は斜里町に来た彼に、目一杯のお礼を込めて氷点下 10℃ の凍った湖の上で氷に穴を開けて釣りをする「氷上釣り」を体験してもらった。ワカサギという小魚（北海道では本来は必ず火を通して食べる魚）を釣り上げた彼は、釣り上げた瞬間に踊り食いし、「ミジユンにそっくりな味だ」と笑顔で答えてくれた。

今後、彼は西表島の川魚を調べて標本を送ってくれると約束をしてくれた。魚という生き物を通じて私にも絆ができたのだ。

次世代へ伝える

今年、私は世界遺産学習を担当してから 3 年

目になる。昨年と比べて竹富町のことを斜里町の子どもたちに話したくて少しワクワクしている自分がある。きっといつもの問いかけも自信をもった明るいトーンに変わるのだろう。

「知っているかい。斜里町と姉妹町の町はどこ？」



西表島でガイドしてくれた青年と北海道でのワカサギ釣り

友だちの絆

竹富町・弘前市との交流を進める会
元斜里町立知床博物館学芸員 村田良介

はじめに

竹富町と斜里町は、日本列島の両端の国立公園というつながりによって、51 年前の昭和 48(1973) 年 1 月 10 日に姉妹町盟約を結びました。

この年には両町長の相互訪問に続いて斜里の中学生が竹富を訪れ、翌年には竹富の中学生が訪れています。このような子どもたちの交流は今も続いています。

昭和 49(1974) 年には漁業交流のために斜里から竹富に船を運ぶ計画が実行されましたが、途中の千葉県沖で沈没するというアクシデントもありま

した。また、昭和 51(1976) 年には若手農業者 20 数名がサトウキビ刈りや水田耕作のお手伝いをしています。

交流記念館

盟約 20 周年の平成 5(1993) 年には、知床博物館に併設して姉妹町友好都市交流記念館が建設されました。

これに先立つ資料収集調査に私自身も学芸員として参加したのですが、当初は、見るもの聞くことのすべてが新鮮で興奮の日々でした。この足かけ 3 年間の「たけとみ通い」によって私の人生観が大きく変わったことは言うまでもありません。この間の学芸員や、関係者の八重山滞在は延べ 100 日を超え、関わった全員が「たけとみ色」に染まっていったのです。

沢山の竹富の人達に助けられて交流記念館は完成しました。交流展示室には、赤瓦民家やサバニをはじめとする、民具や祭祀用具、イリオモテヤマネコや貝やサンゴなどの標本が並んでいます。



姉妹町友好都市交流記念館オープン 1993年11月23日

交流の広がり

交流の輪は行政以外にも拡散し、斜里の「竹富ファンクラブ」が竹富町職員と一緒に「マンタピア 94」のハーリー競漕に出場する、竹富でヨサコイソーランチームが踊る、斜里で「種子取祭」や「三線ライブ」を公演し、斜里ねぶたに笛で参加する、斜里の機織りサークルが指導を受けるといっ

た成果は、枚挙のいとまがありません。そして平成 17(2005) 年には、斜里に「しれとこ美ら三線クラブ」が結成され、知床で三線の音が響くようになりました。

平成 20(2008) 年には竹富島で弘前ねぶたを運行する「南北芸能交流」が行われ、35 周年と 40 周年には斜里岳山麓の名水「来運の水」を使って八重泉酒造で泡盛が製造されました。また、両町職員を各 1 カ月間相互に派遣する事業や、学芸員の調査も断片的に続けられ、竹富ファンが増殖し続けています。もちろん斜里の夏祭りでのパインやマンゴー販売は大人気です。



民家で踊り教室 1995 年

50 周年から 100 年へ

令和 3(2021) 年の西表島の世界自然遺産登録によって西表財団と知床財団を軸にした交流も始まっています。斜里町の歴史や文化や自然は竹富町とは異なりますが、違いを知ることは新たな発見や交流の第一歩です。

観光や芸能に加えてお互いの歴史や生活を語り合うことも必要です。行政から町民に拡散した個々の繋がりは、言い換えれば「おともだち」です。それぞれの人の心の中に竹富や斜里というキーワードが根付き、西表や知床のニュースがいつも気になっている。そんな、お互いを思い、案じ、助け合うといった当たり前のことを次の世代に繋げていかなければなりません。今回の写真展がその一助になれば幸いです。

写真展の総括として

写真には写っていないパネルの外のはなし

展示会では、会場を訪れた方々からリアルな声を聞かせていただくことができました。

写真を見ながら、「児童交流だったら、これはTさん家のSくんだね」、「この右に私がいたのに、写ってないさ〜」、「こっちは、役場の職員さんでしょ。若いね〜」、「そうそう、ねふた、来たよね。覚えているよ」写真の背景や、写真に写っていないところまで見てくださる来場者の会話に、島じまを巡って、多くの方々に見てもらえて良かったと思いました。なかには、県外から、この日たまたま観光でいらした方や、北海道に住んでいたとおっしゃる方が足を運んでくださるなど、竹富町と斜里町の絆を新たに発見することができました。

来場者皆さま方が各々の斜里町との関わりや、斜里町を訪問した時の思い出など、目を輝かせながら語る様子を目の当たりにして、一般的な観光や物見遊山だけではない、姉妹町の絆や意識の高さ、愛情を感じることができました。姉妹町との



竹富島ゆがふ館でのパネル展オープニング



西表島大原離島総合センター

交流は、「そこに行けて良かった」「北海道に旅行出来てラッキーだった」というレベルのことではなく、あらゆる分野での50年にわたる地道で息の長い交流のうえに築き上げられてきた賜物だということが再確認できる機会となりました。

ショックなはなし



知床博物館に展示されているサバニ

特に印象的だったのは、「斜里町に行って知床博物館の展示室を訪れた際に、ものすごくショックを受けた」と話された方がいたことでした。

「まさか、北海道の博物館の中に、赤瓦の民家があって、サバニがあって、島の景色が展示されているとは思わなかった。斜里町の皆さんが、どれほど竹富町のことを想い、姉妹町の絆を大切にしてきたのかを感じることができ感動した。けれど、それ以上に自分たちは、何をしてきたのだろう。斜里町を知る努力をどのくらいしてきたのだろう。竹富町に斜里町の何があるのか。そのことに対する恥ずかしさと、申し訳なさが入り混じってショックだったねー」と。

言われてみれば、竹富町のどこに斜里町の何かがあって、姉妹町のつながりを確認できるものがどこにあるのか、残念ながら自信をもって紹介することはできません。姉妹町交流というものの、うわべだけの交流に終始してはいなかったらうかと反省するばかり。

斜里町に行って受けたショックを気付きに変え、今後活かしていくことが、これから先の課題なの

かもしれません。

新型コロナウイルスの影響により、対面での交流が制限されてきた3年を経て、多くの交流が再び動き出しました。この3年は、停滞の期間ではなく、多くのことを考え直す期間であり、良いところを再確認するための期間と捉え、関係を再構築する絶好のチャンスとしていけたらと思います。

違いを豊かに

文化や暮らしの違いを知るためのツールが多ければ多いほど、お互いの理解が深まると言います。

今回、斜里町の皆さんの訪問にあたり、三枝さん、白井さんはすでに多くの成果を持ち帰り、博物館の展示や広報誌で発信してくださっています。

村田さんをはじめとする歴代の学芸員のみなさんや、斜里町職員や住民の皆さんが収集してこられた、赤瓦の民家やサバニ、小浜島の獅子頭、イリオモテヤマネコの標本などに加え、今回新たに西表島で採種した魚や石炭、炭坑のビール瓶など新たな資料が登録され、知床博物館の展示はますます充実していると報告がありました。先輩方の活動や記録の蓄積は、若い世代に着実に受け継がれていると実感できます。

斜里町では「竹富ファンクラブ」が結成され、三線や笛を練習したり、竹富島から唄者を招いてコンサートをしたり、さまざまな取り組みを通して、竹富町に寄り添い理解しようと努めてくださる方々が増えていると聞きました。

町を上げて竹富町との絆を深めようとしてくださる姿勢に、姉妹町の結びつきを感じます。押し付けでなく、家族のように思いやる関係を続けてきたからこそその成果だということが写真展を通して見えてきました。

これまでの50年の歴史を振り返りつつこれから先に繋げていけるよう、各々ができることを考えていきたいものです。その意味でも、今回の写真展は、斜里町と竹富町の50年間の繋がりを再確認するツールの一つになったと思います。

私のスマートフォンの天気予報には、斜里町が設定されています。斜里町7月12日、気温は最高23℃、最低17℃。もうすぐ雨が降りそうです。

竹富町役場の掲示板に貼られた、「しれとこ斜里 ーねぷたフェスティバル」のチラシが気になります。日々30℃を越え、熱中症アラート発令中の南の島から、今日も斜里町に想いを馳せています。

(米盛恭子)



ゆめホール知床口ビー展 6月1日～16日
(写真：知床博物館提供)



ゆめホール知床口ビー展にて展示された、西表島調査で収集した資料 (写真：知床博物館提供)



ゆめホール知床口ビー展にて展示された泡盛「来運の泉」
(写真：知床博物館提供)

〈写真展参考資料〉

1 姉妹町交流 50 周年のあゆみ展 竹富町内芳名録記載人数

開催日	開催地	時間	芳名数
3月8日～18日	竹富島ビジターセンターゆがふ館	8:00～17:00	48
3月25日～30日	祖納公民館（西表島西部）	9:00～17:00	43
4月13日	黒島伝統芸能館	11:00～15:30	29
4月20日	小浜公民館	11:00～15:30	26
4月26日	波照間農業集落センター	11:00～15:30	39
5月2日	離島総合センター（西表島東部）	11:00～16:00	31
5月7日～10日	竹富町役場本庁舎エントランスホール	8:30～17:15	20
5月18日	鳩間島コミュニティセンター	9:00～14:30	7
合 計			243

※本庁舎ホール開催は来庁者や職員など観覧者は多かったが芳名記載は少なかった。また、鳩間島開催は沖縄県立図書館移動図書館と同時開催のため来場者は多かったものの芳名記載が少なく正確な観覧者数は不明。

2 交流写真展期間中のゆめホール知床入館者集計

開催日	入館者	写真展観覧者	開催日	入館者	写真展観覧者
6月1日	711	203	6月9日	272	91
6月2日	173	58	6月10日	休館日	休館日
6月3日	休館日	休館日	6月11日	225	75
6月4日	288	96	6月12日	300	100
6月5日	300	100	6月13日	63	21
6月6日	111	37	6月14日	320	107
6月7日	150	50	6月15日	258	86
6月8日	275	92	6月16日	114	37
合 計				3,560	1,153

● 【Information】 ●

竹富町史編集係では、斜里町とのこれまでのあゆみや絆を『竹富町史だより』を通じて記録発信しています。



姉妹町盟約締結し、握手をする瀬戸竹富町長と藤谷斜里町長が表紙の『竹富町史だより』〈第52号〉（2023年8月20日発行）では、「〈特集〉斜里町との交流史」、冨間正八「大自然しれとこー自然・文化・人との出会い」、波照間純一「斜里町との漁業交流」、「斜里町・竹富町親善交流年表」を掲載しています。



『竹富町史だより』〈第53号〉（2024年2月28日発行）には、「資料紹介・斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料〈1972年〉」、三枝大悟「書評・『竹富町史だより』〈第52号〉を読んで」、「斜里町からの寄贈資料一覧」を掲載しています。

竹富町史所蔵写真のデジタル化事業について

米 盛 恭 子

1. 著作権と肖像権

竹富町史編集係には、様々な問い合わせや依頼があります。問い合わせ元は、放送局や新聞社、公民館、学校、会社、最近では個人的に知りたい調べたいという問い合わせも増えています。

特に多いのが、竹富町史編集係で所蔵している写真の提供や転載に関する依頼です。該当する写真が、町史編集係で撮影したものや、提供者が許可（撮影者名や提供者名を明記すれば使用できるなど）しているものであれば、すぐに許可提供できるのですが、そうでない場合は、写真を撮影した方が提供者に許可を取らなければいけません。本来、所蔵する際に使用の許可を得ていれば、問題なく提供できるのですが、許可されていない資料を利用する場合には、どうしても必要な手続きになります。

インターネットが普及し、自分の知りたい情報の検索が容易になった時代でも、個人が撮影した写真や映像は著作権で保護されているため、他人が勝手に使用することはできないのです。その他に、集合写真や複数人が写っている写真の場合は、肖像権の問題もあり、撮影された方々への許可が必要な場合もあります。

2. 『写真集ぱいぬしまじま』と『ぱいぬしまじま 50』

竹富町史編集係では、これまでに 23 冊の『竹富町史』と『竹富町史だより』（現在〈第 53 号〉）を発刊しており、なかでも、『写真集』からの写真提供依頼は特に多いといえます。

写真集に関しては、『竹富町史別巻③ 写真集ぱいぬしまじま（＊1）』、『竹富町政施行 50 周年記念誌 ぱいぬしまじま 50（＊2）』の 2 冊の写真集に収録されている写真について、多くお問い合

わせいただきます。

『写真集ぱいぬしまじま』は、町内の島ごとに村落、自然・産業・交通・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の項目に分類した写真集で、写真の総数は 924 枚、モノクロ写真が主体ですが、なかにはカラーで掲載されたものもあります。

『ぱいぬしまじま 50』は、1948 年（昭和 23）の町政施行から、1998 年（平成 10）までの竹富町の 50 年の足跡を、写真や年表等で集成した記念誌で、町民の暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真で編集されているほか、人口や歴史年表、歴代町長なども一覧できます。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流のあゆみを盛り込むなど、竹富町ならではの歴史的な価値を持つ内容になっています。

竹富町史編集係で所蔵している写真資料の多くは、概ねこの 2 冊の編纂の際に収集された写真になりますが、その他にも歴代の担当者や町史編集委員によって記録、収集、整理された島じまの祭祀や史跡、風景などの写真まで含めると、紙ベースで約 3 万 5,000 枚になります。

3. 何時でも利用できる資料として

『写真集ぱいぬしまじま』の「発刊のことば」で、當山哲男委員長は「町史編集調査協力員が写真収集活動とともに、石垣島、沖縄本島、本土在の町出身郷友会、県内外の写真家の皆さまからの提供がありました。（中略）そして最終的に、町保管のものを含め、1 万 3 千枚以上（の写真を収集）その中から 924 枚の写真を精選し収録」したと述べています。さらに、「紙面の都合で本写真集に掲載できなかった写真は、貴重な資料として整理、保存し何時でも町民に利用できるようにしてありま

す。」とも。

巻末に掲載された、写真提供及び協力者は158人、協力機関として町内小、中学校11校、その他に20か所の企業、団体など、総数として189の個人団体に及んでいます。

また、『ばいぬしまじま50』は、『写真集ばいぬしまじま』の発刊から5年後の発刊で行政資料・写真提供機関及び個人として62個人及び団体名、参考資料として10機関の名称が挙げられており、2冊とも多くの方々や関係機関からの協力で収集された貴重な資料だということがわかります。

『写真集ばいぬしまじま』は、発刊から31年、『ばいぬしまじま50』は26年を経ているため、写真の提供者の中にはすでにお亡くなりになった方々もいらっしゃると思います。

この場合、転載や使用の許可をいただくためには、ご遺族の方に許可を取ることになります。写真提供の経緯をお伝えし、許可を求めるのですが、ご本人の手元にはすでに写真の現物がなく、町史係で所蔵されている写真を提供することになります。

4. 竹富町史所蔵写真のデジタル化について

町史編集係で所蔵している紙ベースの写真は、約3万5,000枚と述べましたが、紙の写真資料は経年劣化の可能性が高く、「現物資料の破損・汚損及び劣化の進行を抑制」するための対策として、デジタル化に取り組んでいます。

デジタル化することで、保存状態の悪い資料や、西表島編、黒島編などへの活用頻度が高い資料を優先して、昨年度(令和5)は約1万枚の写真をデジタル化することができました。

今年度(令和6)は、残りの資料のデジタル化に加え、基本データの整理を行う予定です。

今後はデジタル化した写真資料を、竹富町のホームページや国や大学等のプラットフォームにおいて広く公開することができたらと考えています。データを公開することで「資料の検索性が向上する」「時間や場所の制約がなく閲覧できる」など、

多くの人にとってメリットがあると考えられ、誰もがいつでもどこからでも利用できるシステムが構築できたらと思います。

5. デジタルアーカイブ

近ごろ、デジタルアーカイブという言葉が耳にする機会が増えてきました。デジタルアーカイブについて、南城市教育委員会の田村卓也氏は「デジタルアーカイブは、文書、映像、写真などいろいろな資料を整理して誰でもいつでも引き出せるような状態にしておくというのが、アーカイブの大事なところ」だといいます。また、沖縄デジタルアーカイブ協議会の深谷慎平氏は「法律的な根拠は憲法第12条で、自由や権利は国民の不斷の努力で保持し続けなければならないということで、国民の義務規定と位置付けている」とも(*3)。

沖縄県内においても、「沖縄県公文書館」をはじめ、「那覇市歴史博物館」、「琉球大学附属図書館」、「沖縄県立図書館」、「南城市」など、多くの機関がデジタルアーカイブ、デジタルコレクション、デジタルミュージアムなどでデジタル資料を公開しています。また、クレジットを入れれば、借用申請手続きを行わなくても自由に資料を使用できるなど、利用の手軽さにより活用の幅も広がっています。

実際に「竹富町」や「西表島」というキーワードで検索すると、沢山の資料や写真に出会うことができます。活用できる資料が増えることで、町史の編集にも役立ちますし、読者の理解の助けに繋がります。資料が、収集、保管、研究のためだけではなく、学校教育や社会教育、地域行事、祭祀はもちろんのこと、個人の知りたいに答えるアイテムとして利用することで、豊かな社会の実現に繋がっていくものと思います。

(*1)『竹富町史別巻③ 写真集ばいぬしまじま』(1993年、以下『写真集ばいぬしまじま』と略記)。

(*2)『竹富町政施行50周年記念誌 ばいぬしまじま50』(1998年、以下『ばいぬしまじま50』と略記)。

(*3)『モト』〈Vol.52〉(編集工房東洋企画、2023年)3頁参照。

編集後記

2022年6月30日に石垣金星氏、2024年2月2日に西里喜行氏がお亡くなりになりました。竹富町史編集委員会は、あいついで2人の委員を失い、その大きな空白をひしひしと感じているところです。本号は、はからずも石垣氏、西里氏の追悼号のようなかたちとなりました。お二人への哀悼の意を表し、著作目録を作成しました。ともに遺された記録や論考からは、多大な功績はもちろん、八重山人、島人としての矜持が強く迫ってきます。本号をお二人の御霊に捧げます。

その他、石原絹子氏の「諸見里秀思を訪ねて」、大城肇氏の「鳩間公民館の起案資料」、大城一文氏の『白浜歴史年表』の作成にあたって」を収録しました。

石原絹子氏は、八重山舞踊の一流派・勤王流の創設者である、諸見里秀思の足跡を親族の立場からたどっています。八重山芸能史においては、「謎の勤王流」と目されているだけに、秀思の人物像もはっきりしないものでしたが、黒島の風土、時代背景を重ね合わせながら考察を進める石原氏の筆により、おぼろげながらも血の通った秀思の姿が浮き上がってきました。

大城肇氏、大城一文氏の原稿は、ともに公民館に関する資料を活用したものです。第46回町史編集委員会において、公民館資料の重要性と、その保存・継承・活用が話題のひとつになっていましたが、それに呼応する内容であるかと思います。

また、2024年上半期における町史編集系の動向の一つとして、写真展「姉妹町交流50年のあゆみ展」について、その経過を報告しました。斜里町と竹富町の姉妹町締結は、日本列島の南北両端の国立公園を有することを由縁とするものですが、2023年度は恒例の児童交流のみならず、両町民がお互いに訪問しあい、また職員同士の交流などがみられました。そのなかで町史編集係が中心となって担った写真展は、年度をまたいで町内の島々を巡回し、斜里町ゆめホール知床で無事フィナーレを迎えることができました(6月1-16日)。

『竹富町史だより』の編集にあたっては、まずは町民に親しみやすく、また活用されることを常に心がけ、試行錯誤を繰り返しています。そのようななかでも、収録された史資料(論考、記録、記事、報告、写真など)が、まったく別個のもの同士であっても、それらの意外な関係に気づいたりすることがあるのも編集の醍醐味です。また、いつか史資料が読む人の運命を動かしたり、世界中を驚かせたりすることもあるのでは、と想像しながら進める作業もなかなか楽しいものです。

(飯田泰彦)

2024年8月9日発行

竹富町史だより

第54号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp

